
タカクラ・テルの警視庁脱走と三木清の獄死

山野 晴雄

はじめに

久保田無線厚生農場事件で検挙された作家のタカクラ・テル⁽¹⁾が、1945（昭和20）年3月に留置されていた警視庁から脱走した。タカクラは2週間後に逮捕されたが、哲学者の三木清がタカクラをかくまつたことから検挙され、敗戦後の9月に三木は豊多摩刑務所で獄死した。

この事件は、生きていれば戦後日本の言論界で活躍し、さらに独自の「三木哲学」を打ち立てることが期待されていただけに、知識人などからは、三木を獄死させる原因をつくったタカクラに対して非難をする声は少なくなかった。たとえば、久野収は「三木の経歴、家庭環境、三木の戦後にはたす思想的意義を少しでも考えれば、どれほど当時の状況が急迫していたとしても、高倉は、三木の疎開さきへたちまわるべきではなかった。高倉の判断のあまさは、やはり批難されなければならない」（久野 1975：54）と、述べている。また、中島健蔵は、三木清が「反軍国主義、反ファシズムの態度ヲくずしたことがなく、フィリッピン方面軍への徵用解除後も、隙あらば、とねらわれていたことは明かであった。そういう事情を知らないはずがない高倉テルが、脱獄逃亡の途中、親友の三木清の家へ立ちよったという行為は、錯乱の結果の裏切りというほかなかった」と述べ（中島 1979：161）、藤田省三は、タカクラが警視庁から「逃亡」したこと自体に疑惑をいだき、警視庁から逃亡することは「ありえない」、「おかしい」と指摘し（藤田1998：192）、尾崎秀樹も高倉は「警察から逃げだしたということになっていますが、そんなことがあるでしょうか。そして逃げ込んだ先が、三木清のところなどです。高倉が逃げ込んだ先の人が、みんな捕まってしまいます。三木清はそれで獄死してしまいます」と、述べている（尾崎 1999）。

このタカクラの警視庁脱走から三木の獄死にいたる経緯について近年、鹿島徹と山田正行による論考が相次いで発表された（鹿島 2016、鹿島 2017、山田2018、山田 2019）。鹿島は、三木の甥である速水融氏へのインタビューによる証言を織りませながら、三木の獄死の日付と状況、三木の疎開、タカクラの脱走と三木疎開先訪問、三木ら3名の検挙の経緯について詳細に検討し、各回想・証言の食い違いを明らかにしている。その中で三木のタカクラ逃亡帮助を警察当局がどのように知ったかについて、一般にはタカクラが逮捕されたときに着ていた「外套」に三木の名前があったことが検挙につながったと言われているが、これは「うまくできすぎている」とする速水の証言を紹介し、山崎謙の回想などをもとにタカクラが積極的に告白した可能性を指摘するとともに、山崎謙についても三木の娘・洋子が「わたしは許さない」と言っていたという速水の証言を紹介している。山田の論考は、三木が「聖の偏在」という至高の次元においてデモニッシュな歴史や時代と格闘し、未来を創造しようと生き、死んだことの意味・意義を明らかにするとともに、三木の沈黙の意味を分析し、その生と死の意義をあきらかにしようとしたものであるが、その中でタカクラの脱走と三木の検挙について検証し、山崎謙や藤田省三などの回想を重視して、「逃亡」というより「泳がされた」か、「警察と

なんらかのしかたで意を通じていた」かとみるのが適合的であるとし、また、安田徳太郎の回想をもとに、タカクラは「義兄さえ陥れようとした」とし、タカクラは警察の「卑劣な手先になりさが」り、「世にもきたない謀略」をはかった人物として、鹿島よりもより踏み込んだかたちでタカクラを描き出している。

本稿では、タカクラの評伝研究の一環として、久保田無線厚生農場事件からタカクラの検挙、警視庁からの脱走、再検挙、そして三木の獄死までを跡づけるとともに、鹿島や山田の見解についても検討したい。

1. 久保田無線厚生農場事件

海軍御用のラジオゾンデ（高層気象観測用気球）を製造する久保田無線の労働者更生施設である農場が東京・八王子市の郊外、元八王子村にあった。関口竜夫は、1944（昭和19）年、その農場長（支配人）となった（関口竜夫・菊子 1978：181、関口 1984：1）。

関口は、長野県佐久の岩村田出身で、1930年に茨城県の日本国民高等学校職員となり、32年3月にはタカクラ・テルを慕って別所温泉の常楽寺別荘に6か月間移り住み、その後、39年には青森県戸来村の戸来農民学校に勤務、40年には大政翼賛会組織部に入り、留岡清男・風見章らと知り合い、44年には翼賛青年団本部で地方まわりをしたときに訪れた長野県小布施村の青壮年団史をまとめた『小布施村』（報道出版社）を出版している（関口竜夫・菊子 1978：180-181、関口菊子1982：55）。タカクラとは、1941年にタカクラが「生まれかわる農村」をレポートするために、写真家の土門拳、中央公論社の青地晨らとともに千葉・茨城・青森を取材旅行した際にも同行しており、親しくしていた（⁽²⁾）。

この関口からタカクラは、44年夏ごろから農場の経営指導に招かれるようになった。タカクラ・ツウは、タカクラの指導について、「自分の各地の農村調査から引きだした、理論おもとにして、新しい経営方法お打ち立てることに努力し、しかも、それが、かなりの成功おおさめた」と、述べている（タカクラ・ツウ 1955：390）。

また、11月20日にはタカクラが「耕す者は永遠である」という題目で、農場職員や勤労奉仕に來ていた東京・新富町の芸者衆30人ほどに1時間余りの講演をしている。関口は、2人の若い女の子に感想を聞くと、「今日先生のお話をじーっときいていて私、考えこんでしまったの。ふるさとの熊本に両親がまだ健在で、百姓ぐらしをしているから、山深い熊本へ帰ろうかしら……と。又もう1人の若い女の子も、徳島県の吉野川べりの農村で、兄2人は出征しているし、年老いた両親が苦労しているだろうと思うと、すぐにも帰って両親と百姓ぐらしをしたいわ……」と話したといい、その2人の若い女の子の話をそばで聞いていた中年の女性は、「紺の前掛を両手でもみながら、ためいきをつくように、『私は新潟の山形よりの漁村から来ているんだけれど、ふるさとへ帰っても、もう両親ともいないし、たった1人の兄も応召して戦地からの便りもないし、兄嫁は2人の子どもをかかえて何をしているか、畠もあるけれど、私はいまでも両親とくわを握ってくらしたふるさとの若い日のことを夢に見るのよ。もう、どうしようもないわ……』と涙ぐんでいた」と、回想している（関口 1984：2）。

すでに11月11日には農場職員の岡村キヨが検挙されていたが、このタカクラの講演があった日の夜、関口は、警視庁に治安維持法違反で検挙された。タカクラによる農場の耕地整理の指導が、「ソ連の農業経営（コルホーズ）運動」とみなされたのである。そしてタカクラも11月23日、大磯で検

挙された⁽³⁾。また、タカクラと関係していた佐藤正二も、検挙されている（さとう 1996：17）。

関口やタカクラの検挙について、『特高月報』（1944年11月分）は、次のように書いている（明石・松浦 1975：295-296）。

「(1)右関口は共産主義者高倉輝の影響を受け共産主義思想を抱持するに至り、特に農民運動に関心を持ち、最近に至る迄高倉其の他の左翼分子と連絡を保持し実践活動を意図す。

(2)昭和十五年芝田忠雄の紹介に依り、岡林夫妻と連絡なり、殊に昭和十七年五月に岡林夫妻が再度の検挙により釈放されるや密接に交友し、共産主義的農場経営、農民運動の基盤たらしむべく、長野県下其の他に於て種々画策せるが、其の後久保田無線直営厚生農場に潜入し、岡林を始め高倉輝・滝沢一郎其の他の左翼分子多数を同農場に出入関与せしめ、一方自らも使用農民に対し、ソ連の農業経営（コルホーズ）の優秀性を宣伝し、或は高倉と協力し農場図書室を設備し、久保田無線の工員の啓蒙を意図せる外容疑事実濃厚なり。

(三)右関口竜夫の陳述に依り同人と同一容疑事実を以て十一月二十三日、

神奈川県中郡大磯町大磯八八四

著述業 テル事 高倉 輝（五四）

を検挙目下取調中。」

検挙された関口は、警視庁の雑居房に入れられ、3日目の夕方には2階の部屋に連れ込まれ、3人組の特高による「しないでめった打ちにして、なぐる、ける」の拷問で、気絶した。「地下室にはこびこまれたことも、全然おぼえていない。地下室の夜明けは寒く、体中がうずくように痛く、目がさめた。うす暗い窓ガラスにうつった顔を見て、オレはおどろいた。まっ赤である。そばにある水道の蛇口に這い寄って手を洗い、そーっと少しずつ顔をこすった」という。その翌日からは毎日、3階の調べ室に呼び出され、「日本農業の近代化」「ボルシェビイキ」などのテーマで手記を書かせられた。その後、1945年2月に巣鴨拘置所に移され、8月15日の数日前に釈放された（関口 1984：3-7）。

タカクラが検挙されると、ツウは「こんどの留置わ長びく」と思い、「知らすべき所」へはすぐに通知した（タカクラ・ツウ 1955：393）。佐藤正二も、ツウから手紙を受けとった1人であった⁽⁴⁾。そして、ツウは、警視庁への差入れに通うようになったが、大磯から警視庁までは国鉄と市電で1時間かかり、初めて警視庁の入口に立ったときには「妙な気持」になり、「この陰気な建物にわ、思いなしか、ひどく冷酷な雰囲気がただよっているように感じられ」たという。第1回目の差し入れでは面会が許されなかった（タカクラ・ツウ 1955：394）。

留置生活でタカクラを一番悩ませたのはシラミであった。ツウは、タカクラの着物を家に持ち帰るたびに、釜でゆでてシラミを殺していたという。また、暖を取るために、ツウは、家からまきやたきぎを運んだ。そして、タカクラは、世の中の情報を得るために、差入れの際、ツウに「新聞紙で物お包んでこさせ、それとなく、目おとうしてしまう」ようにしていた。ある日、新聞の片隅に、ドイツ共産党の指導者、エルンスト・テールマンが収容所で虐殺された記事を発見し、その事実を知ってからは、タカクラは「何ごとか、ふかく、考えこむようになった」という（タカクラ・ツウ 1995：400-404）。

1945年2月、タカクラから、「近いうちに、刑務所え送られることになるので、マント、きもの、げた、その他、必需品お、いっさい、取りそろえて、とどけてもらいたい」ということづてがあった。そこで、当時医学生であった娘の信が品物を届けると、タカクラは、信に注射を打たせて、張り切っていたという（タカクラ・ツウ 1955：410）。

2. 警視庁脱走

タカクラ・テルが取調べ中の警視庁から脱走したのは、1945（昭和20）年の3月6日のことであった⁽⁵⁾。

タカクラの脱走と動機の経緯について、ここでは、タカクラ・ツウ「私の歩いてきた道（自伝草稿）」⁽⁶⁾の記述をもとにたどってみたい。

ツウは、タカクラが警視庁を脱走しようとした動機と経緯について、次のように述べる。

「警視庁に収容されていらい、タカクラわ、あらゆる機会を利用して、情勢の変化おつかみ、独自の判断お下していた。もちろん、自分自身わ、社会から切りはなされているので、判断に狂いがなかつたわけではない。しかし、外にいるわたしたちよりわ、はるかに正確な見とうしお持っていた。すでに、敗戦がさけられない以上、タカクラの関心わ、戦争がどういう形で終るか、そして、そのためにわ、自分わ、どういう仕事おすべきか、ということであった。しだいにはげしくなる空襲警報のなかで、タカクラわ、まいにち、このことお考えて、くらした。そして、こうしたときに、エルンスト・テールマンの死わ、タカクラの脱獄の決意お、決定的なものにした。刑務所え送られてしまつてからでわ、脱走の機会わ失われる。逃げるなら、警視庁にいるあいだである。タカクラわ、三か月のあいだに、計画おねり、少しずつ、準備おととのえて行った。近く、刑務所え送られるからといって、家から、衣類も、取りよせた。当座の交通費として、五円の金お、たびの底に、こつそり、しのばせておいた。あとわ、チャンスおつかむばかりである。」

タカクラは、この戦争が負けることは開戦のときから認識していたが、警視庁の留置場で連日のように空襲警報を聞く中で、敗戦が必至であるにもかかわらず、敗戦後の準備ができておらず、誰も行動に移そうとしていないことに焦る気持ちをいだくようになっていた。このことは、タカクラが、三木清の獄死後、三木の遺子・洋子に謝罪するために公表した文章の中でも、次のように説明している（高倉 1946：75）。

「なぜ私が警視庁から逃げなければならなかつたか？そんなとっぴななことを何のためにしたんだ？そう考えている人も少なくないでしょう。あるいはあなたもそう思つていられるかも知れません。しかし、私としては實にいっしょけんめいだったんです。戦争はもうすぐすむ。日本は降伏するほかはない。しかし、このままですんだらいつたうなるか？私たち人民の敗戦に対するじゅんびは、何もできていない。そんなありさまで、とつぜん敗戦となつたら、人民の混乱はどんなだろう？そのため、一日も早く戦後のじゅんびをしなくてはならない。留置場なんかにべんべんと日をすごしてはいられない。私は、まいにち、空襲の警報をききながら、やもたてもたまらぬ気持でした。私の行動はとっぴで、あせりすぎていたかもしれません。しかし、私としては、できてもできなくても、敗戦にそなえるじゅんび活動をするために、すきさえあつたらも自由な身になりましたかったです。」

タカクラのいう「敗戦にそなえるじゅんび活動」とは具体的にどのような活動なのか、詳細はわからないが⁽⁷⁾、ナチスに対抗したテールマンの死は、行動に移す決意を固めさせることになった。

3月6のことであった。警視庁を脱走する機会が訪れた。長くなるが、ツウの記述を引用する（タカクラ・ツウ 1955：428-433）。

「三月になった。タカクラのかかりのなかに、少しのろまな特高が、ひとり、いた。この特高が、腹おいためて、ひどいげりおしていた。三月六日、タカクラわ、三階の調べ室で、この特高といつしょに、向かい合つていた。へやわ、ついたてで、半分に仕切られ、ついたての向うがわからわ、他の事件の取り調べにあたつている特高の声がきこえる。やがて、タカクラのかかりの特高が、ついたての向うの同僚に、『ちょっと、たのむ』と、声おかげ、調べ室のまえの便所え立つて行つた。タカクラわ、耳おすました。バタンと、大便所のとびらのしまる音がする。タカクラわ、スッ

クと、立ち上がった。『今だ！』と思う。しかし、『いや、あぶない！』という気持も、どこかで、した。ついたての向うでわ、相かわらず、特高が話おしている。このへやえ出入りする者の姿が、ついたての向うからも、半分ほど、見えるはずである。もし、特高が入口のほうお向いたら、『万事休す』である。タカクラわ、全身の勇氣おふるいおこした。マントとげたおかげると、ぞうりばきのまま、スルリと、とびらの外えぬけだした。特高の姿が、チラリと、目に入ったが、さいわい、こちらわ、気ずかれなかつたらしい。タカクラわ、急ぎ足で、三階から二階え、二階から一階えと、かけおりた。入口で、ぞうりおげたにはきかえると、守衛に、『さし入れです』と、頭おさげて、ついと、警視庁の正門から、外え出た。そして、かねてからの計画どうり、さいしょにきた市電にとびのつた。何よりも、まず、追手おまいてしまわなければならない。今ごろわ、かかりの特高が、便所から出てきて、大きわぎしているはずである。要所、要所に、手配しているにちがいない。タカクラわ、車掌席のそばに立って、じっと、窓の外お見はつていた。すると、電車のうしろから、自転車にのって、追っかけてくる者が、何人もある。タカクラわ、『しまつた！』と思った。タカクラにわ、それが、ぜんぶ、特高のすがたに見えた。しかし、彼らわ、そしらぬふりおして、電車お追いぬいて行つてしまつた。さいわい、これわ、こちらの思いすごしだつた。当時わ、特高も、民間人も、戦闘帽に国民服、巻きゲートルといひでたちなので、ふつうの人が、みんな、特高に見えたのである。こうして、タカクラわ、とちゅう、何度も、胆おひやしながら、池袋駅まで、たどりつくことができた。」

池袋に着いたあと、タカクラは、東武東上線に乗ろうとしたが、米の配給通帳を持っていなかったため、切符を買うことができなかつた。東上線を使ってどこまで行こうとしたのかはわかっていない。ツウは、次のように書いている（タカクラ・ツウ 1955：433-434）。

「池袋発の東武線の電車に乗ろうとして、タカクラわ、ハタと、行きずまつた。この電車のキップお買うためにわ、米の配給通帳がいるということまでわ、考えに入れていなかつたからである。しかし、一刻も、猶予わならない。タカクラわ、ただちに、上野駅えまわつた。すでに、このとき、警視庁わ、上野駅えも網お張つたのであるが、タカクラわ、人ごみにまぎれて、汽車に乗りこむことに成功した。」

タカクラは、上野駅からどこへ行ったのかはわかっていないが、おそらく京浜東北線に乗り、浦和駅へ行き、6日は浦和市（現・さいたま市）大谷場の中條登志雄のところで泊まつたと思われる⁽⁸⁾。

中條は、新潟県村上町（現・村上市）出身で、堀之内村（現・魚沼市）の丸末書店の店員をして、1922年に、地元の商工業に従事する青年たちのグループ・響俱楽部が渡辺泰亮らと魚沼夏季大学（のち魚沼自由大学）を創設すると、それに協力し、23年に山本宣治とともに自由大学に出講してきたタカクラと親しくなる（山野 2023：103-162）。25年に丸末書店をやめ、タカクラの推薦で出版社のアルスに入社、29年にはロゴス書院を設立し、30年にはタカクラと安田徳太郎の編集による『山本宣治全集』全8巻を刊行している。ロゴス書院が倒産したあと、アルスの北原鉄雄の推薦で廣告業のオリオン社に入社している（戸田 1972：177-179、山野 2023：154）。タカクラとは新潟の自由大学時代以来のつき合いがあつた。

3. 山崎謙宅訪問

タカクラ・テルは、3月7日の夕方近く、東武伊勢崎線の粕壁駅（現在の春日部駅）近くに住む、哲学者の山崎謙の家に姿を現した。山崎の『紅き道への標べ』によれば、次のようにあった（山崎 19

「三月七日の夕方ちかく、高倉テルが僕を訪ねてきた。折あしく僕は、風邪から肺炎をおこして奥の寝室にやすんでいたが、高倉は玄関を通らずにいきなり中木戸から入りこんで、僕の寝ている前の庭先へあらわれた。たまたま僕の枕元に坐っていた二人ほどの見舞客をはばかってか、高倉は、『あがってもよいか』と外から声をかけた。おもい頭をあげて見ると、二重まわしの外套に下駄ばかりで、みすぼらしい鳥打帽子をかぶっていた。」

タカクラが山崎と知り合ったのは松本慎一を介してで、タカクラは山崎の家を訪ねたこともあった(松本 1948b : 37)。タカクラと松本とは、1939年6月にタカクラが革命的ローマ字運動事件で高輪署に検挙され、そこで松本と知り合い、同じ宇和島中学出身であったことから意気投合したという(タカクラ・ツウ 1955 : 322-323)。その後、古在由重が唯物論研究会事件で釈放になった40年11月ころから三木清の家で碁会が開かれるようになると、タカクラ、古在、松本や渡部義通、大内兵衛らが顔を合わせるようになった(古在 1967 : 83-84、岩倉 2012 : 202)。したがって、タカクラと山崎とが知り合ったのはこれ以後のことになる。

タカクラは、なぜ山崎を訪ねたのか。山崎は、タカクラの話として、「僕の所は食糧事情がよいのでここなら一週間や一〇日ぐらいは配給外の人が割りこんでも問題はない」と判断したことあげている(山崎 1975 : 244)。松本慎一は、タカクラが山崎の家を訪ねる可能性があることを、次のように書いている(松本 1948b : 37)。

「埼玉には私の友人山崎謙がいる。私はかつて高倉氏を彼に紹介し、高倉氏もいちど山崎君を訪ねたことがある。地主である彼の城のような家を高倉氏が思い浮かべるのは、極めて自然である。二人が知合ったのは新しいことだし、特高の連中もこれはめったに気がつくまい。」

山崎によれば、タカクラから事情を聞くと、次のようにあった(山崎 1975 : 243-244)。

- ・警視庁を脱走したのは6日で、その夜は「手近の友人宅に一泊した」が、そこは「あまりにも知られすぎている関係」なので、早々に引きあげて山崎のところへ来たこと。
- ・山崎宅は食糧事情もよいので来たが、警視庁にある「友人名簿」には山崎の名前が載っているため、長くはいられないが、「現下の情勢下では指名手配に附ける写真に手まどるから、まず一週間は大丈夫だろう」ということ。
- ・その間に移動先を「信州か津軽」に移動先を決めてあるので、鉄道の乗車券の手配をしてもらいたいこと。

タカクラが「敗戦までの僅かの期間かくまいつづけてもらえる条件がある」ところとして「信州か津軽」をあげたとのことであるが、当初からタカクラが潜伏先として考えていたのは青森であった⁽⁹⁾。

こうして山崎の承諾を得てかくまつてもらうことになった。その後の状況を山崎の回想にもとづくと、次のようになる(山崎 1975 : 244-248)。

一日おいて3月9日には早くも村の駐在巡査がタカクラのことについて問い合わせにくる。山崎は素知らぬ顔で突っぱねたが、そのやりとりを隠れて聞いていたタカクラは、「長居はあぶない」とさとり、「今晚か明早朝に他へ移動したいから至急に乗車券を手に入れてくれ」と頼まれたため、山崎は村長を訪ねたが、証明書の発行を拒まれる。

そこでタカクラは、徒歩で行け、友人名簿にも載っていない人の家を考え、埼玉県豊岡町(現・入間市)に住む地元有力者で自分のファンである人物宅に向かうことにし、10日の早朝、山崎の妻が用意した防空頭巾を目深にかぶって、徒歩で出かけた。しかし、豊岡界隈は警察の非常線が張られていて、「危険でとてもちかよれない」として、その日の夕方、山崎宅に戻ってくる。

計画を根本的に建て直さなければならなくなり、考えたあげく、タカクラは、「『三木に会えばなんとかなるから案内してくれ』と言いました」。三木の大家である農家は「米の横流しなどで諸方の

ボスどもと深いコネをもっているだろう」と想像したことであった。

この山崎の回想では、タカクラの三木清疎開先訪問は、タカクラから言い出したことになっているが、タカクラの三木洋子宛の回想では「山崎くんの意見もあり、山崎くんといっしょに鷺の宮のあなたの家をたずねることになったのです」とあり（高倉 1946：79）、食い違いがある。鹿島徹は、「当時の状況からたいへん危険なことであった三木宅訪問を、はたして山崎がと主導したのか、高倉が言い出したのかは、三木再検挙・獄死にたいする『責任』にかかわる重大な点だが、筆者には判断をくだすだけの材料がいまのところない」（鹿島 2017：8）と、判断を保留している。ただ、岩倉博は、タカクラとも親しい古在由重の回想をもとに、「高倉ははじめ山崎謙のもとに潜んでいたが、山崎が身の危険を感じ、三日ほどたってから高倉テルを三木清のもとに送った」（岩倉 2012：247）と、山崎が主導した可能性を示唆しており⁽¹⁰⁾、また、宮島光志は、「三木の所に向かうよう、近しい人間がそそのかしたという見方がある」と、名指しはしていないものの山崎がそそのかしたという見方を明らかにしている（木村 2025）。私も山崎が主導した可能性が高いと考えている⁽¹¹⁾。

4. タカクラに対する指名手配

タカクラ・テルが警視庁を脱走すると、タカクラはただちに指名手配され、関係先には特高刑事や巡査が訪れ、聞き込みや張り込みをする事態となった。

神奈川県大磯のタカクラの自宅には3月6日の夜、警視庁の顔なじみの特高刑事が訪れている。ツウの回想によれば、次のようにあった（タカクラ・ツウ 1955：413-426）。

やって来た特高たちは、静岡の帰りで、一晩やっかいになりたい、と言ってきた。話を聞くと、「タカクラの調べも、まもなく、終り、近いうちに、刑務所^{ママ}え送られることになるので、きけば、母親が病気だそうだから、とくべつの親心おもて、タカクラお、あす、ひとばんだけ、自宅えかえすことになった」と言い、部長と一緒に付いてくるので、部長と落ち合うために、ここで待っていたい、ということであった。

翌7日の朝には、べつの特高がやってきて、「奥さん、じつわ、昨夜、タカクラお大磯えかえすとちゅう、有楽町の駅で、空襲警報がでたので、部長とタカクラが、そばの防空壕えとびこんだ。ところが、警報が解除になってから、部長が壕の外えてみると、タカクラが、いつのまにか、いなくなってしまった。きっと、ひとりで、家えかえってくると思うから、タカクラに会えるまで、いさせてもらいたい」と、言ったので、ツウは、「タカクラの身が気使われた」が、この特高たちの話には、何か「ふにおちない」と感じた。

8日には、また2人の特高がやって来て、タカクラの家は「まるで、特高の巣みたい」になった。そして、9になると、「タカクラが、警視庁^{ママ}えかえってきましたから、さし入れに行ってもらいたい」と、特高が言い出し、なだめすかしながら2人の娘、信と房を、特高が2人付いて警視庁に連れて行ってしまった。しかし、2人が警視庁に着くと、それぞれ別の部屋に通され、取り調べが行われた。娘たちは、そこではじめて「父親が警視庁から脱獄したことお知らされた」のである。とくにこの前差し入れに行った信のほうは、「タカクラの脱獄お手伝ったものと見なされ、特高課長、じきじきの、取り調べお受けた」が、何も知らなかつたため、らちが明かなかつた。そこで、今度は、「母親のほうがあやしい」ということになり、その夜、娘たちと一緒に大勢の特高が大磯の自宅に乗り込んできた。そして、子ども4人を別室に監禁すると、ツウに対する取り調べが行われたが、「こちらも、全く知らないとなつたので、けっきょく、手がかりわ、何もつかめずに、訊問がおわつた」のである。

大磯の自宅は、いつも特高刑事が4～5人が張り込むようになり、「わたしたちと特高たちとの奇妙な共同生活」が始まった。そして、「共同生活」が半月近く続いたある日のこと、急に特高たちは、「どうも、長らく、おせわになりました」と言って、さっと引き上げてしまった。それから一週間して、「警視庁から、タカクラのさし入れママお持ってくるように」という通知ママお受けた。わたしたちわ、タカクラが、ついに、たいほされたことママお知ったのであった。

タカクラと交友関係にある関係先にも特高刑事などがやって来た。

松本慎一は、タカクラが脱走し、特高刑事の張り込みにあったことを、次のように回想している（松本 1948b : 37）。

「三月になって高倉氏は警視庁を脱走した。警視庁は大騒ぎになった。本庁から脱走されたのでは、所轄署に対して面目がたたない。警視庁はそのために予算がすっかり涸渇するほどの電報料をつかって、彼の行方を捜査した。彼のアドレス・ブックにのせられているほどの人物は、誰彼の差別なしに、特高刑事の訪問を受けた。風見章さんも西園寺公一君も大内さんも、みな見舞れたそうだ。私のところは、念入りにも朝から晩まで刑事が張りこんでいた。それは三月十日の大空襲で、一切の警察がそんなのんきなことに手を割いてはいられぬほどの緊急事態に当面した時まで続けられた。高倉夫人の私への手紙は、まぎれもなく、開封検閲され、一週間も遅れて届けられた。」

松本の回想の中にも出てくる風見章は、タカクラとは別所温泉時代からの知り合いであり、信濃毎日新聞の主筆をしていたときには、「思温荘雑話」などの文章をタカクラに書かせており、近衛文麿内閣のときの書記官長を務めた人物として知られる。その風見は、警察が来たときのことを、「警察より高倉輝氏立ち廻りはせぬだらうかと聞きに来る。これは一昨日夜、警視庁特高課よりの依頼とて大崎署の巡查夜分に來り、留置中の同氏（治安維持法抵触の嫌疑）脱走自殺のおそれありて、こゝへ立ち廻るかも知れぬから、その節は知らしてくれと申し出たる件の続き也」と、日記（昭和20年3月8日条、北河・望月・鬼嶋・2008、326頁）に書き記している⁽¹²⁾。

松本の友人である吉在由重も、特高刑事が来ていたことを、次のように回想している（吉在 1967 : 86）。

「ぼくはタカクラがつかまつたのは知っていたが、ぬけだしていたことは知らなかった。そのころ、ある晩に松本慎一のところをたずねると、松本が『門の所にスパイが張ってはいなかつたか。夕方にはいたのだが……』というのだ。松本がためしに近所をぶらついてみたら、あとをつけてきたから、多分スパイだろう、ということだった。ぼくの身辺も他のことでかなりざわついていたので、用心して帰途についた。翌日、当時ぼくが勤めていた回教協会にゆくと、同時ぼくの家に同居していた美術評論家の林文雄さんの夫人が、家のまわりにスパイがいるという。松本とぼくがスパイにつきまとわれる理由がどうしてもわからなかつたが、結局タカクラのことからだつたらしい。というのは、一週間ほどたつてから、ぼくには内緒にして夫人に『この家にタカクラ・テルという男がこなかつたかどうか』と質問した、ということだから。しかしタカクラが逃げていたのは知らなかつたので、おそらく刑事のうそだろうと思っていました。」

文芸評論家中島健蔵のところにも特高が訪れている。東方社に勤めていた中島のもとへ、「高倉テルという人物を知っているかと問い合わせ、彼の動静について何か知らないかとたずねた」という。特高が東方社を訪ねたのは、「わたくしたちの出版社にいた一人の青年が、社の用で、高倉テルの指導していた農場へ取材に行き、名刺を残して來た」ことからであった。中島は、高倉について、それとなく特高に聞き出すと「脱獄した」と口をすべらせたという（中島1958 : 255-257）。

また、詩人で文芸評論家の野田宇太郎のところへも、「警視庁の特高と新場橋署の私服」の2人が河出書房にいたところへ来ている。野田によれば、「高倉テル氏が一ヶ月半ほど前に大磯で検挙され

警視庁に送り込まれてみたが、つひ三日前の空襲のどさくさに、取調べも終って釈放にならうといふとき逃走してしまったのだと云ふ。私服が私をたづねたのは高倉氏の交友録に私の名があったからだ」とし、「この高倉氏の警視庁逃亡事件はあまり突然なことだったので、私をひどく驚かせた」と記している（野田 1958：149-150）。河出書房に勤めていた野田は、タカクラが『日本の農業』を出版することになり、その担当をしており、大磯のタカクラの自宅も訪ねていたのである（野田 1958：7-8）。

大正期の自由大学運動に関わり、当時、東北帝国大学教授であった新明正道のところにも刑事が来ている。刑事は「『近々先生のところにタカクラさんがあらわれることになっている』ということで、『もし見えたなら自分の方へ通報してくれ』というようなことを言ってきたんです。（中略）『私のところへどうしてタカクラさんがくるのか。どういうことなのか』といったところが、『そういうことはいえないが、東京にいて東北からどこか北の方にタカクラさんが来ると。これはちょっと問題がある、ぜひとも仙台でタカクラさんを捕らえる必要がある』というようなことをいうんで、『私もむかしさかたかった方だが、ちょっと来られるというわけもないと思うが、私は通報するようなことはしないから、もしなんだったらみんなの方で監視に来ていればいいじゃないか』といって断わったわけです。それでも、そういう話があったもんですから、タカクラさん、あるいは顔を見せることがあるかと思っていたところが、それきりになりました」と、新明は回想している（新明 1975：7）。

当時、東京の青山で医院を開業していた、ツウの兄、タカクラにとっては義兄に当たる安田徳太郎のところにも特高刑事が張り込みに来ている。そのときの特高はゾルゲ事件の時に取り調べを担当した依田警部補だった。安田は、次のように回想している（安田 1976：282-283）。

「たしか昭和二〇年の二月頃であった。この日はひじょうに寒くて、夜に日比谷方面で空襲がはじまっていた。ところが、灯火管制の真暗ななかを、わたくしを取調べた依田警部補が、私服の部下三人を連れて、わたくしの家にとびこんてきて、『高倉テルさんが、いま警視庁の留置場を脱走して、草履ばきのまま、お宅の方面に逃げました。まだ来ていませんか』と、大きな声で言った。それでわたくしの家内が『そんなにはっきり分かっていたなら、なぜつかまえなかつたのですか』と言ったら、『足が早くて、つかまえられなかつたのです。いずれ来るから、しばらく張らしてください』と言って、待合室に入りこみ、持参の炭を火鉢について、待っていた。わたくしのほうは、バカラしくなって、相手にせずに寝てしまった。そのうち夜もふけて來たので、依田警部補と二人の私服はいつのまにか帰ってしまった。もちろん高倉さんも姿を見せなかつた。夜があけると、張りこみの私服も、コソコソ帰ってしまった。じっさい奇怪な事件であった。」

安田の回想では、タカクラが警視庁を脱走したことから、特高刑事が安田の家を訪ねてきた日付を「昭和二〇年の二月頃」としているが、3月の記憶違いである⁽¹³⁾。なお、山田正行は、この「二月頃」は「二月二四日」の可能性が高いとしているが（山田 2019：288）、2月24日と3月6日の2度にわたってタカクラが警視庁を脱走したことはありえない⁽¹⁴⁾。

警視庁は、タカクラを指名手配するために、多額の費用を使ったといわれる。松本慎一はさきに引用したように「警視庁はそのために予算がすっかり涸渇するほどの電報料をつかって、彼の行方を捜査した」（松本 1948b：37）といい、ツウは「彼ら（注、警視庁－引用者）が、タカクラの友人関係お洗えば洗うほど、知人の数わ、ますます、ふえて行くいっぽうなので、かかりも、すっかり、ねおあげてしまって、『タカクラという男わ、どこまで交際が広いのか、見当もつかない』と、あきれていった。警視庁わ、満洲、朝鮮から、南洋に至るまで、手配の電報お打ったという」（タカクラ・ツウ 1955：422）と記している。

5. タカクラ・テルと三木清

警視庁がタカクラ・テルの行方を追って全国に指名手配をしているさなか、タカクラは埼玉県鶯宮町（現・久喜市）の三木清の疎開先を訪れる。

タカクラが三木のもとを訪れたのは、京都大学時代からの長い付き合いがあり、信頼関係があったからである。

タカクラが三木と知り合ったのは1916年のことであった。タカクラが京都帝国大学の嘱託をしているときに、西田幾多郎、波多野精一らの講義に出て、哲学専攻の学生であった三木と知り合い、三木がよくできる学生だったので、タカクラも敬服していた。

その後、2人は親しくし、タカクラはいろいろ三木に迷惑をかけたが、「いつでもこころよく助けてくれ」、「それは、けっしてたんなる友情からだけではなく、同志として助けあった」（高倉 1948：81）という。タカクラは、嘱託をやめて作家への道を歩み、長野県上田・小県地域の青年たちが創設した上田自由大学の運営に土田杏村とともに協力し、別所温泉に定住する。一方、三木は、1926年に処女作『パスカルに於ける人間の研究』を出版、27年には法政大学教授となった。28年には『唯物史観と現代の意識』を出版、マルクス主義の創造的な展開を意図して羽仁五郎らと雑誌『新興科学の旗のもとに』を発刊した。タカクラは、自由大学を通して地域民衆と結びつき、1928年には上小農民組合連合会の結成など地域の農民運動に関わるとともに、同年11月、再建された上田自由大学の講師として三木を招く。三木は別所温泉のタカクラの家に泊まりながら「経済学に於ける哲学的基礎(哲学論)」を講義したが、また、そのとき弾圧で切れていたタカクラたちと「第二無産者新聞」との連絡をつけるなどの協力をしている。

1930年、三木は、日本共産党に資金提供をしたという理由によって逮捕され、豊多摩刑務所に収監されたが、釈放されると、しばらくタカクラのいる別所温泉で静養している。三木は、法政大学を退職後、活動の場を文筆活動に移していく。一方、タカクラは、33年の二・四事件で検挙され、長野県を追放され、東京に移住する。35年1月に開かれた「高倉君の夕」には秋田雨雀・安田徳太郎・藤森成吉・河崎なつらとともに三木も出席している（山野 2019）。

1938年には、西田幾多郎の諸論文を三木がドイツ語に翻訳編纂して『西田哲学綱要』としてドイツに渡り、タカクラが日本語に翻訳されたものをローマ字に移植することになったとの記事（『読売新聞』1938年12月26日）が出ている。これは実現しなかったが、難解な哲学用語をローマ字によって平易化しようという試みであった⁽¹⁵⁾。また、41年ころからタカクラは、鎌倉に住む西田幾多郎宅をたびたび訪れ、「一部の人にしか分からぬニッポンの哲学の用語」を「新しく作りなおさなければならない」という意見を持っていたので、西田を説いて、その賛成をえたあと、三木と打ち合わせて「新しい哲学辞典」を作る計画を立てていたが、これもその後の情勢の変化によって実現しなかった（タカクラ・ツウ 1955：386-387）。

1940年11月に古在由重が唯物論研究会事件で釈放になったころから、三木の家で碁会が開かれるようになった。ここでタカクラと古在は知り合ったが、三木、大内兵衛や松本慎一らとともに「戦争とファシズムの強圧のもとにひととき碁をたのしみ、なんとはなしに水いらずの雑談に時をすごした」のである（古在 1963：102）。タカクラは、「時節がら、碁を打つ会」ということにして、「時勢の研究会」を開いたとしている（タカクラ・テル 1986：136）。

三木が埼玉県鶯宮町（現・久喜市）に疎開をしたのは1944年9月のことであったが、三木から「どこか近くのいなかへ疎開したい」という話がおきたとき、三木からタカクラにも相談あった（高倉 1948：79）。小林勇によれば、この疎開は、食糧事情と空襲を避けるためだけでなく、「自分（注、

三木－引用者)が弾圧され得るといふこと」も考えて決めたという(小林 1946: 104)。タカクラは、山崎謙に連絡をとったと思われ、三木の蔵書を東武線の粕壁駅の近くの山崎の家に移した(高倉 1946: 79)。三木は、鷺宮町の農家の別棟2階に疎開するが、それは、久喜に疎開してた森宏一の紹介によるものであった(森 1967: 3-4)。そして東京・高円寺の本宅は、タカクラの世話で、文人囲碁会で知り合っていた野上彰が留守番をすることになった⁽¹⁶⁾。

このようにタカクラと三木とは長く親しいつきあいが続いていた。したがってタカクラにとって三木は、脱走後、頼りにできる特別の人間のひとりであった。

羽仁五郎は、「松本慎一や古在由重といった共産主義者のところへ行かずに、なぜ高倉テルは共産主義者でない三木清のところへ行ったか」と問い合わせ、「思想家として松本慎一や古在君よりも、三木清を信頼していたということなのだ」と述べている(羽仁 1976: 84)。タカクラは、山崎謙の家で長居はできないことを悟ったとき、信頼できる友人三木を頼り、訪れたのである。

6. タカクラの三木疎開先訪問

タカクラ・テルが三木清の疎開先を訪れたのは、3月12日の夕方のことであった。

三木洋子は、「高倉さんが尋ねていらしたのは、三月十二日のまだ寒い夕方であった。ちょうどその日、父は岩波さんの選挙のことで朝から東京へ出掛けていた。下で何かごとごとして話し声が聞えたのでもう御飯かしらと思っていると、のっそり高倉さんが入っていました。」と、タカクラが来たときのことを書いている(三木 1948: 157)。

タカクラは、三木を訪れたときのことを、「途中で山崎くんと別れて、私がひとりたずねたときは、もう夜に入っていました。三木くんは東京へ出て、るすで、あなたがひとりあの百姓やの物おきの二階でべんきょうしていました。」と記している(高倉 1946: 79)。

タカクラが三木の疎開先を訪れるときのことを、山崎謙は『紅き道への標べ』で、次のように詳述している(山崎 1975: 249)。

山崎は、三木のところも危ないはずなので下見が必要だと考え、熱が落ち着くのを待って、ひとり自転車で様子をうかがいに行った。三木は不在であったが、農家人から状況を確認して、途中まで戻ると、タカクラと出会った。タカクラは、「待ちきれずに出てきてしまった」のであるが、そのときタカクラは、山崎が預かっていた「三木の疎開荷物のなかから、三木の衣類を取り出してそっくり着こんでいた」。そこで三木の家の状況を簡単に説明し、終列車で帰る予定の三木と駅で会って一緒に行くようにと、時間を過ごすのに適当な寺の境内まで案内してから別れたのだが、タカクラはその「指示を無視して勝手に三木の室へ入りこんでしまった」。

ところが、この山崎の回想は、小林勇が三木洋子から聞いた話とは、大きく2つの点で異なっている。1つは、山崎が一度、三木の疎開先をタカクラとともに訪ねていること、もう1つは、タカクラの服装が三木の衣類を「そっくり着こんで」はいなかつたことである。小林は、次のように書いている(小林 1961: 105-106)。

「洋子が久木の学校から帰ってくると、家主の渡辺が、山崎謙氏と一緒に妙な恰好をした人が先生をたずねてきたが、二人ともいないといったらまたくるといって帰ったと話した。洋子は夕方の室内一人でいた。すると下で話声がしたので、夕御飯になったのかと思った。そうではなくて、そこへ高倉氏がのっそり入ってきたのだった。顔は防空頭巾でかくし、外套の下にワイシャツ一枚で、片足にだけ足袋をはいていた。ものすごい恰好なので、はじめは高倉さんだとは気がつかなかった。」

鹿島徹は、この「証言の相違は相違として、そのままにしておくほかはない」（鹿島 2017：9）としているが、洋子のタカクラの服装に関する回想は一貫しており、信用性は高いと思われる。

そして三木清が帰宅したのは、夜10時過ぎであった。この点は、三木洋子の回想と、タカクラの文章とは一致している。洋子は、「父が帰るまで、かきもちを焼いたりした。高倉さんは何時もと違って妙にだまり込んでいた。父が帰ったのは、十時過ぎの終電車だった。（中略）父は高倉さんの顔を見るなり『やあ』といって、驚いたような、しかしどことなく嬉しそうな顔をした。」と回想し（三木 1948：157-158）、タカクラは、次のように書いている（高倉 1946：79-80）。

「あのばん、三木くんがかえってきたのは十時をすぎていました。私のかおを見るなり、おどろいたかおをして、

「あなたがひどい目にあっていたと云うことだったが。」

と云いましたが、私が、

「その話はあとでするから、それより先に、久しぶりにごを打とうじゃないか？」

云いますと、三木くんも、

「それはいい。」

と云って、すぐごを打ちはじめました。」

そして、碁を二番打ったあと、「にげたことを話して、三木くんに助けを求めるためです。三木くんは心よくしようとして、相談にのってくれました。」と。

ここには、「相談」の具体的な内容は書かれていらないが、青森へ移動するための乗車券の手配と、当面の生活に必要な服装、現金などの借用だったと考えられる。三木洋子は、父が検挙されたあと家主の渡辺から、タカクラは「父の外套に着かえて、トランクを持ち、防空頭巾をすっぽりかぶって、父に送られて停車場の方へいった」と、聞いたとし、「外套やお金のほかに洋服もあげたらしい」と回想している（小林 1961：107-108）。また、小林勇は、三木が渡したのは靴、外套、青森までの切符だったとしている（小林 1963：313）。毎日新聞は、警察情報をもとに書いたとみられる「高倉テル氏を匿ふ 三木氏検挙理由」という記事には、「自分の洋服から靴、鞄まで変装用具として與へた上、青森行の切符入手して渡し更に金品を與へ逃亡させた」（『毎日新聞』1945年10月5日）とあるのは、それを裏づけていよう。

こうしてタカクラは、三木の疎開先で一晩泊めてもらったあと、3月13日の午前中に三木に駅まで送られ、埼玉県鷩宮町をあとにした。

7. タカクラの青森逃亡と三木ら3名の検挙

三木清は、タカクラ・テルと別れた当日、すなわち3月13日に岩波書店の廊下で小林勇にタカクラが警視庁から脱走してきたことの次第を事細かく話した。小林は、切ない気持ちで「手おくれだと思ひ乍らも」、いろいろ注意をして他言しないことを約束させたところ、「大丈夫だと思ふがね」と自信のない声で言ったという（小林 1946：110）。タカクラをかくまつたことが自分の身に累を及ぼすかもしれないという不安感を、三木はいだいていたことが知られる。

そして三木は、タカクラと別れたあとすぐに、「万事とどこおりなく済みましたから御放念ください」という簡単な葉書を山崎謙に送ったという（山崎 1948b：226、山崎 1975：250）。

松本慎一は、3月の中旬に、三木清から使いが来て、「ねらわれているから気をつけるように」と言づてがあり、タカクラが三木と連絡をとったと「直覚」した。ただ松本は、タカクラは「直接に三

木君を訪ねるような危険を犯すことはあるまい。この二人の京都時代以来の関係は警視庁の熟知するところだろうから」と考えていた（松本 1948b：36-37）。当時、三木が警察当局からねらわれていたことはよく知られており、その三木をタカクラが直接訪れるることは極めて危険であることは、松本もよく認識していたからである。

三木と別れたタカクラは、当初から移動先として決めていた青森県五戸町に住む大金西蔵のもとへと向かった。

ツウの自伝草稿では、「三木さんに、衣類や、旅費おお借りして、翌朝はやく、ここお立った。三月十日わ、れいの東京大空襲の日である。この夜、タカクラわ、浦和市にて、炎炎と燃えさかる東京の空お見つめていた。そして、無限の感慨にひたりながら、ひそかに、東北え去って行った。」（タカクラ・ツウ 1955：435-436）と、書かれているが、タカクラが三木のもとを去ったのは3月13日であり、3月10日では日付があわない。三木宅訪問を東京大空襲と結びつけて記憶していたものと思われる。三木の家のあと浦和にいたとすると、久喜から青森に向かうのに浦和まで後戻りすることになり、その可能性は低いと考えられる。

大金は、タカクラが別所温泉に定住し、農民運動に関わっていたころ、上田温泉電軌の重役をしており、タカクラが「観光地別所温泉に住む『文化人』なるの故」をもって「電鉄のバスを呈上」し（大金 1952b：34）、タカクラを助けた人物で、1937年には青森県五戸町に移住し（大金 1952a）、五戸鉄道（のち南部鉄道）の重役をしていたといわれる（関口竜夫の発言、自由大学研究会第14回秋季研究例会、1986年9月27日）。タカクラが訪れたときのことを大金は、次のように回想している（大金 1952b：36）。

「私は、高倉氏の思想には、共鳴しない者であるが、信州別所温泉で知ってから、二十年來の關係で、来たる者は拒まず、一ヶ月余もみちのくの山奥にかこつておいた。その頃の警察は、今のやうなぐうたらではない。どうして検べあげたか、警察では早くも高倉氏を知って、うるさく私の身元を洗ひたててみた。」

大金は「一ヶ月余」と回想し、ツウは、自伝草稿で、「タカクラわ、青森県の知人のせわで、あるはなれの座敷お借り受け、ここで、十日ほど、生活していた」と書いているが（タカクラ・ツウ 1955：436）、実際はそれよりも短く、大金のもとにいたのは6～7日間であったと思われる。山崎謙は、「高倉から後日じかに聞いた話」として、「高倉が先方（注、青森－引用者）へ着いてみると既にその筋の手がまわっており、高倉がイメージしたような長期滞在なぞは思いもよらない条件であった。辛うじて幾日かをかくれすごした後、なんとか場所替えをこころみる以外に手はなくなってしまった。乗車の手つきをどんな伝つてもとめたのか、ともかく、そこを立ち退いて、以前の目標の埼玉県豊岡をさしてカムバックした。」と書いている（山崎 1975：250）。

タカクラは、警察の動きも察知し、また、ツウによれば、「生活費もとぼしくなってきたので、資金の調達おかげで、関西え向かうこととした。そこから海外え脱出するつもりであった。」という。そして、まずタカクラは、「埼玉県豊岡の、ある航空会社の社長の家」を訪ねたのである（タカクラ・ツウ 1955：436）。上京する際、大金によれば、「私の服装をつけ、私の名刺や鞄を持ち、あくまで私として行った」という（大金 1952b：36）。

埼玉県豊岡町の「航空会社の社長の家」というのは、石川源一郎の家である。石川の祖父・幾太郎は1893年に石川組製糸を創業し、最盛期には全国に9工場をもつ有数の製糸会社に発展させ、一時は武蔵野鉄道（現・西武池袋線）の社長にも就任した実業家であった。石川組製糸が1937年に経営悪化のため解散したあと、源一郎は、豊岡飛行機製作所の社長として手腕を發揮し、中島飛行機の下請け会社として軍用機の部品製造で会社を発展させていた（石川・石川・阿部編 2002：526-527）。ツウによれば、石川は、「ばくちで、警視庁え留置されていたが、そのときに、タカクラと親しくな

った」（タカクラ・ツウ 1955：436-437）という⁽¹⁷⁾。

タカクラが石川の家に着いたのは3月21のことであった。タカクラは、旅の疲れで、ぐっすり寝込んだところを、家から警察に密告され、逮捕された。ツウは、タカクラが逮捕されたときのことを、次のように書いている（タカクラ・ツウ 1955：437-438）。

「タカクラは、旅のつかれで、その夜わ、ぐっすりと、ねこんでしまった。そして、そのあいだに、この家から、警察え密告されたのである。警視庁わ、それとばかりに、土地の警察の応援おえて、タカクラのたいほにかけつけた。このあたりでわ、近ごろにない大捕物であった。タカクラわ、人声に、ふと、目おさました。天井に、妙な光が、チカチカと、入りまじっている。と思った瞬間、たちまち、僕のように、ぐるぐる巻きにされてしまった。天井の光わ、警官の懐中電灯の明りだった。タカクラの身がらわ、ただちに、警視庁え送られた。」

タカクラが逮捕されたのは3月21日の午後12時頃であった。『特高月報』原稿には、「二十一日午後十二時頃埼玉県入間郡豊岡町石川源一郎方に於て再検挙せられたる」とある（明石・松浦 1975：300）。

このタカクラをかくまったく容疑で、1週間後の3月28日には三木清・山崎謙・中條登志雄の3名が検挙された（明石・松浦 1975：300）。

山崎謙は、タカクラ検挙の日を3月27日の未明であるとし、その翌日の夕方に自分も逮捕されて、刑事室で一足先に逮捕されていた三木と顔を合わせた、と回想している（山崎 1975：250）。

中條登志雄の検挙については、オリオン社時代に知り合った戸田達雄が、次のように回想している（戸田 1972：183）。

「戦局がいよいよ苛烈になってきたころ、高倉輝氏が、留置されていた警視庁から脱走して、浦和の中条さんの家に寄り、衣服を借りて着替え、またどこかへ姿を消すという事件があって、警視庁は中条さんを逮捕し『中条登志雄という黒幕的大もの?』と色めき立った。けれどもいくら調べても高倉氏と旧知でいろいろと恩顧を受けたことはあるが、共産主義的大ものではないことがわかり、約二週間の後釈放された。」

三木清は、3月28日の午前10時ころ、岩波書店2階にある岩波茂雄の部屋で逮捕された（小林 1961：106）。すでに前日の27日には、森宏一によれば、三木の疎開先居室に「警察からきて三木さんの帰りを待っている」2、3人の男が張りこんでいたという（森 1967：4）。27日は貴族院議員補欠選挙の投票・即日開票の日にあたり、三木は上京し、立候補して当選した岩波茂雄が選挙協力者のために開いた祝宴に出席したのち、高円寺の本宅に泊まっている（小林 1963：315）。

それでは、三木がタカクラの逃亡帮助を行ったことは、どのようにして警察当局に知られることになったのか。

一般には、タカクラが逮捕されたときに着ていた「外套」に三木の名前があったことが検挙につながった、と言われている。タカクラ自身は「ワイシャツ」であったとし、次のように回想している（タカクラ 1986：134）。

「再逮捕後の取り調べは厳重をきわめたが、わたしはなんにも答えなかつた。しかし、わたしには、大変な不覚があつた。わたしの着ていたワイシャツの首のところに、かすかに『ミキ』と読める、洗たく屋の覚え書きが残っていた。こうして、前から当局が目をつけていた三木がとらえられることになった。」

これに対して、山崎謙は、タカクラが積極的に自白したとし、検挙された夜、警視庁地下の留置場で、同じ房にいた山下徳治（当時は森徳治）から、指で山崎の掌に字を書く仕方で、次のようなことを伝えた、と証言している（山崎 1975：251）。

「君が今日くることはわかっていた。昨日の調べで高倉が君と三木のことをペラペラしゃべってい

た。僕は山下徳治だが、たまたまカーテン一枚へだてた隣室で調べを受けていた僕の耳に、高倉の自供が筒抜けにきこえてきた。」

鹿島徹は、三木だけでなく、山崎・中條がそろって検挙されたことを考えると、「積極的に高倉が自白したというのもまったくありえない話ではないだろう」（鹿島 2017：14）とし、山田正行は、山下（森）の「言動は信頼できる」（山田 2019：291）としている。

山崎の回想によれば、森がタカクラの自供を聞いたのは3月27日ということになる。山崎は、タカクラが検挙されたのは27日と記憶していたから、タカクラは検挙されるとすぐに自白したように書いているが、山崎の回想にある山下（森）の話が仮に事実だったとしても、21日に逮捕されたタカクラが何も自供しないなか、タカクラが着ていた「ワイシャツ」に洗濯屋の「ミキ」の覚え書きが発見されてしまったため、27日に三木や山崎にかくまつてもらったことを自供したと考える方が、経過としてはかなっている⁽¹⁸⁾。タカクラの長男・太郎は、晩年、それまで作成した年譜では、1945年の項に、「三月六日、警視庁の正門から脱走。三月二十一日、埼玉県豊岡町で逮捕される（この事件のため、三木清氏獄死の原因を作る）」と記していたが、2014年に「最終稿」として作成した「年譜タカクラ・テル」では、「（……三木清氏獄死の原因を作る＊）」とし、空白部分に「＊嚴重な取り調べにもかかわらず、テルは『何もいうことはありません』をくりかえすだけだった。ただ、テルは知らなかった。自分がきていた、三木氏から借りたワイシャツのえりの下のつまみのうらに、せんたく屋が小さく『ミキ』と書いておいたことを。こうしてテルはまえからねらわれていた三木氏を逮捕する絶好の口実を警視庁にあたえてしまった。」と書いた紙を貼り付けて注記している（高倉太郎 2014）。ここには、逮捕されるとすぐ自白したとする山崎の回想を否定し、父・テルから聞いた遺言ともいるべき証言を書きとどめておいたように思われる。

8. 三木の獄死とタカクラの解放

タカクラ・テルは、3月21日に再逮捕されたあと、25日には長女の信も付き添い、巣鴨拘置所に送られた（タカクラ・ツウ 1955：441）。

28日にはタカクラをかくまつた容疑で三木清・山崎謙・中條登志雄の3名が逮捕された⁽¹⁹⁾。犯人蔵匿・隠避罪違反と治安維持法違反の容疑であったが⁽²⁰⁾、山崎は4月7日に「十日ばかりで釈放」され（内務省送致係 1938～1945；松本 1948：38）、中條は1週間後の4月4日に釈放された（内務省送致係 1938～1945）。だが、三木は警視庁に約2か月半留置されたのち、6月12日に巣鴨拘置所に移送され、1週間あまりの6月20日には「検事拘留処分」を受けて中野の豊多摩刑務所（刑務所内の東京拘置所）へ移されている（枡田 1986）。

タカクラは、9月に入り、A級戦犯収容のため、巣鴨から豊多摩刑務所（拘置所）に移された（山野 2019）。

拘置所内でのタカクラの獄中生活は、ツウによれば、「最悪の状態」になっていた。国内の極度の食料不足を反映して、「獄中でわ、お役所仕事であるから、日に三度わ、必ず、形ばかりの食事が配給されたが、その量わ、大幅にけずられるようになった。このころの食事わ、一回が、小さな湯のみ茶わんくらいの大きさのにぎりめし一個で、それも、麦と大豆とコウリヤンおませたものである。そして、これに、みそ汁が一ぱいついた」。ところが、7月16日夜の空襲で大磯のタカクラの自宅も全焼し、原稿や書籍、資料、その他一切が灰になってしまった⁽²¹⁾。それからは、家族からの差し入れもまったく途絶えてしまい、「食事わ、長い時間おかげで、かみこなすようにしていたが、それでも、

体力わ、しだいに、おとろえて行き、歯も、ボロボロと、かけてきて、物おかむにも、不自由になって」いた（タカクラ・ツウ 1955：468-470）。

もう1つの悪条件は、「獄内の不潔なこと」であった。豊多摩刑務所に横行している蚤、シラミ、蚊、ダニ、南京虫は「警視庁以上」だったという。もう1つ「恐ろしい敵」が疥癬であった。豊多摩刑務所では、この疥癬患者がめずらしくなかった。「廊下にわ、これらの患者の通ったあと、ベタリ、ベタリと、ウミの足あとがついている。タカクラたちわ、その上お、はだしで歩かなければならない。タンカにかつがれて、あらあらしく、運びだされ行く、カイセン患者の死体お、独房から、見送るたびに、タカクラわ、こんどわ、おれの番かと、考え」たという（タカクラ・ツウ 1955：474-475）。

この獄中生活によって、タカクラの体は徹底的に痛めつけられた。タカクラは、そのころのことを、「わたしは、栄養失調のために、腱反射がなくなり、脚気の症状がひどくなつて、しびれが、手足・口びる・舌から、しだいに腹へ広がつた。気力を振りしほってたたかう以外に道がなかつた」と、回想している（タカクラ 1986：134）。

一方、巣鴨拘置所へ移送されたとき、すでに三木の全身は、やがて死につながる疥癬に感染していた。朝日新聞が警察発表にもとづくと思われる「診療報告書その他による三木氏の留置経過」によれば、体重57キロで、「食欲はあったが衰弱してゐる様子があったので直ちに隔離房に入れたといはれる」（『朝日新聞』1945年10月5日）とある。警視庁に留置されたときに、疥癬患者が使用した毛布を、消毒もしないで、そのまま使わせたことが原因であった⁽²²⁾。

拘置所で三木と直接に接触のあったという栗原東洋によれば、巣鴨時代は「白濁した硫黄プロに、毎日一度は入浴できた」し、豊多摩拘置所に移送後も、1週間から10日後に「薬湯入り」の機会に恵まれ、三木もそれに入っていたという（栗原 1955：97、100）⁽²³⁾。しかし、「この程度の入浴では、こじれたカイセンの直しようはない」と、栗原は書いている（栗原 1955：97）。この疥癬罹患に加えて、ごく少量の食事しかあてがわれず栄養状態の悪化がすすんだ。大内兵衛は、豊多摩刑務所の食事は「一日八銭」で、大食家であった三木には「この食事で身体がもてないのは当然」であり、疥癬のかゆみで昼夜の別なく全身をかいているうちに「睡眠不足となり、栄養失調となつた」と推測している（大内 1948：14-15）。

タカクラは自宅が全焼後、家族からの差し入れが途絶えた。三木の場合は、小林勇によれば、東畠精一と相談し、岩波書店の森静夫に依頼して差し入れを行っていたが、5月25日に森の家が空襲で焼けてからは、差し入れは行われず（小林 1972：371）、8月に高円寺の三木宅の留守番をしていた野上彰が2度ほど差し入れを行ったことが知られる⁽²⁴⁾。野上によれば、三木からの葉書が旅行中に岩波書店気付で届いており、「ひどいカイセンにかかっているので、カイセンに利くクスリをもってきて、中野の拘置所へさし入れてくれるよう」、「他に、二、三の書物、座布団など」も頼んでいたという。野上は、「早速クスリなどをととのえて、中野拘置所へ出かけた。本は許可にならず、がっかりした」が、「中、一週間おいて、また差し入れにいった」と、回想している（野上 1963：23-24）。

このように思うような差し入れは行われず、山崎謙によれば、三木は、死の1週間前ほど前に東京の三木宅の「留守番の野上章（注、野上彰の誤りー引用者）」に宛てて、「少々でよいから水飴を差入れてくれ」と葉書で頼み、野上が「三木の近親関係へ知らせたが、みんなそっぽを向いて誰も三木の最後の要求にこたえようとしなかった」、「ちかづくのがおそろしかったらしい」と、野上はつぶやいていたという（山崎 1975：253）。

こうして三木は獄死した。9月26日のことであった⁽²⁵⁾。さきの朝日新聞記事（10月5日）は、次のように報じている。

「九月十七日医者が診察したところ食欲は普通だがむくみが全身的に出てきて尿に蛋白を認め腎臓

炎と診定されたので、ウワウルシ、アンナカなどの利尿強心剤を注射して、居室で自由に臥床してよいと承認、投薬は二十一日までつけられたが格別の変化はなかった。二十五日には食欲が減った（これまで粥食）ので同じ注射を繰返し、検事局に対して病況書を提出する手続きを執った。翌二十六日本人からの申出で保釈願を担当看守が代読して提出手続きを執った。」

この記事を見る限り、重篤な容態にある三木に対して治療を施し、保釈の手続きもとったことになっている。その上で同記事は続けて、「ところが午後三時五分ごろから悪化、同十五分には意識が明瞭であったが同三時半に急逝した」としている。

この三木の獄死については、中島健蔵が、9月30日に「急性腎臓炎というが、暗殺という感じを消すことができない」（中島 1977：259）と書き、高見順も10月1日に「三木清が獄死した。殺されたのだ！」と記している（高見 1965：349）ように、はやくから疑問がだされていた。毎日新聞も、三木の死亡記事の中で「この獄死をめぐって友人たちは死因に釈然たらざるものがあるとして不満をもらしている」として、豊島与志雄の「衛生設備の整つてゐる拘置所」へ移つて疥癬が悪化し腎臓を冒すにいたつたとは「釈然として受取れない」、また、林達夫の「頑健なかれがぽっくり死ぬとは考えられない」との談話を掲載している（『毎日新聞』1945年9月30日）。

三木の死亡時の状況については、伝聞情報や間近で見聞した人たちによるさまざまな回想・証言があり、それらの間にはかなりの相違が見られる。

三木は、豊多摩刑務所五舎階下の病房で亡くなったとみられるが、小林勇によれば、「独房の寝台から汚い床に苦しさに転げ落ちて誰一人知らぬ間に」死んだとし（小林 1946：111）、豊島与志雄は、「病舎にあって三木は、附添ひの者もなく、寝台の外に倒れてゐたことが事実らしい」としている（豊島 1945：13）。

同じ刑務所五舎において三木より1つ上の階に収監されていた神山茂夫は、「九月二十四日」のこととして、午前10時過ぎころに「ひどい糞尿の臭い」がするので、看守を呼んで聞くと、「階下の病舎で今死にかかっている者が最後の苦しみの結果たれ流してゐるんだ」と言い、何房かを聞くと、三木の房の番号を答えた。そこで神山は、自分の房を出て、廊下から階下の三木の房を覗き、「嘗て見たどの死者よりも、激しい苦悶にのたうち乍ら、年配の雑役一人の片手間の看護を、たつた一つの喜びとも、慰めともしている姿」を見入っていた。そして、「午後になって、舎房全体にたちこめていた臭気が、だんだんきえていった」が、これは三木の「生命が終つた結果」であったという（神山 1948：42-43）。三木と真向かいの房に収監されていたという寺尾五郎は、後年、対談の中で、三木が「苦しさで、かきむしりながら寝台からころげおちて、ショックで死んで、その時にクソをもらす」光景を語っている（寺尾・降旗 1991：64）。また、廊下を隔てて斜め向かいの房に収監されていた中村武彦も、「廊下を隔てた左斜め向かいの監房の方から流れて来る異様な臭気が気になって」雑役に聞いたことを、次のように回想している（中村 1994：264）（26）。

「雑役に訊くと、あれは全身疥癬で栄養失調になり、ほとんど意識を失つて死にかかっている男の体臭と汚物の匂いだという。

痒いので寝台から転げ落ち、転げ回り、垂れ流しで手のつけようもない。どうせまた転げ落ちるのだから、落ちたままにしているのだという。その内、悪臭は堪えがたいほどにひどくなつて、数日後に、とうとう死んでしまつたということで、屍体は運び去られ、あとは消毒薬をぶち撒かれてようやく悪臭は消えた。

ひどいなア、一体どういう人間だったのかと看守に訊いてみると、三木清という左翼の学者で、引き取り人がないため外へ出すことができず、あんなことになつたのだという。」

神山、寺尾、中村の回想は、間近にいた人物たちのもので、さきに見た朝日新聞の記事内容とはかなり経過が異なる。おそらく回想にあるように、凄惨な死に方だったと思われる（27）。

9月26日の夜、東畠精一の家に三木の死亡通知が届き、東畠から依頼を受けた甥の速水融が、翌27日に徒歩で豊多摩刑務所に出向いて死亡を確認した（鹿島 2016：6-8）。そして28日に東畠が布川角左衛門らと遺体を引き取りに行った（布川 1967：6）⁽²⁸⁾。

三木が死亡した翌27日、タカクラは、看守から呼び出され、医者の診察を受けた⁽²⁹⁾。タカクラによれば、「がんらい、刑務所では、診察は必ずこっちから申しでるので、向うから診察を受けさせるなどということは絶対に」ないので、「ふしげに思」っていたところ、「翌日、検事がやってきて、からだがわるいようだから、私を保釈にする」と言ってきたという。タカクラは当時、起訴の手続き前の被疑者であった。8月15日以後、戦争が終わるとともに、検事局も被疑者を順次釈放し、被疑者で残っているのは少なくなっていたが、タカクラによれば、「検事局では私を出す意志は少しもなかったけれども、三木くんが死んだので、また私を殺しては、問題が大きくなると困ると思って、やむをえず、出す決心をした」という（高倉 1946：78）。

大磯のタカクラの家族は、坂田山の下にあった茶室を借りていた人のところに同居させてもらったあと、下町にあった大工の家の2階一間を借りて移った。そこで8月15日を迎えた。それから1か月経っても、タカクラについては、何の音沙汰もなかった。

9月29日、係の検事から、「『十ガ ツーヒ』 テルカエス ムカエコイ」との電報が届く。電報を受け取ったツウは、「夢のような気がする」と回想に書いている（タカクラ・ツウ 1955：503）。

10月1日、タカクラは、豊多摩刑務所(拘置所)から釈放された（タカクラ 1986：135）。

タカクラの子どもたち、信・太郎・房の3人が、迎えに行った。しかし、いつまで待っても、タカクラは出てこない。3人は、半日も門の前で立ちつくしていた。ときどき鉄の門が開き、釈放された人が出てくる。その中に疥癬患者らしい人を見かけて、「全身総毛立つ」のを覚え、不安が募った。日が暮れるとやっと、タカクラが姿を現した。「むくみのために、ただでさえ大きなからだが、いよいよ、大きくなっているが、目だけわ、ランランと光っている」。力が抜けているので、3人の子どもに抱えられるようにして、休み休み歩き出した。

そして、タカクラは、ここで、子どもの口から三木の死を知らされた。三木の死を聞いて、「まるで、脳天でもなぐられたように、棒立ちになった」（タカクラ・ツウ 1955：503-505）。ツウは、自伝草稿に、次のように書いている（タカクラ・ツウ 1955：505-506）。

「さすがのタカクラも、ここまでわ予想していなかった。それどころか、釈放後、三木さんと、おたがいに、つもる話ができることお、たのしみにさえしていた。タカクラは、あまりにもざんこくな運命の制裁おうらまないわけに行かなかつた。おれわ三木お殺したのだ！」

その夜、タカクラは、這うようにして、大磯の仮住まいの家に帰った。

こうしてタカクラの戻りが始まった。

おわりに

本稿では、タカクラ・テルが久保田無線厚生農場事件で検挙されたのち警視庁から脱走し、三木清の疎開先に立ち寄りかくまつてもらったことから、三木が検挙され、獄死するにいたるまでの経緯を跡づけてきた。

林達夫は、タカクラが三木の疎開先に立ちまわることにより三木が検挙されたのは「結局運なのだ」と、1年後の追悼文で述べている（林 1946：118-119）。この「運」だとする見方に対しては、最初に指摘した久野収のように、「高倉は、三木の疎開さきへ立ちまわるべきではなかった。判断のあま

さは、やはり批難されなければならない」（久野 1975：54）と、タカクラの行動を批判する見方は少なくなく、中島健蔵にいたっては、三木「暗殺の間接の下手人は、つまり高倉テルという老人だ」（中島 1977：259）と言いついている。すでに日米開戦後の政治的・思想的状況から、三木清が1942年1月にフィリピンに行くころには「危ない」といううわさはしだいに高くなっていた。当局も神経質になっており、「三木さんがねらわれないですむはずがない」と、松本慎一も考えていた（松本 1948a：62-63）。そうした三木の立場を、京大時代から親しくしていたタカクラも当然認識していた。それにもかかわらず、タカクラが三木の疎開先に立ちまわり、三木の獄死につながったことが批判されたのである。タカクラは、三木が獄死したことを知ったとき、「三木を殺したのはわたしだ！」（タカクラ 1986：135）と、自己の非を認め、生涯、良心の苦しみと責任を負うことになった。

しかし、鹿島徹は、久野収の証言をもとに、タカクラが三木のもとに立ち寄った行動に「作為」が働いていたことを示唆している。それは、久野が、「高倉が戦争中、思想事件の前歴者を転向させる横浜思想犯保護観察所に喰いこみ、この観察所の内側に『日本精神研究会』を組織していた」こと、タカクラは偽装転向し、官憲当局と「危険なだましあいのゲームを演じつけ」、その一環として高倉は三木の疎開先に立ちまわることになったとし、「このゲームがどこまで波紋をよびおこすかについて、高倉の判断はやはりあまかったのである」と証言している（久野 1975：54-55）ことから、「これは高倉の脱走が、警察当局により仕組まれていたということになるのあろうか。たとえば警察当局が意図的に脱走を誘導し、高倉もそれに乗った。当局の意図は、高倉の未知の人脈を明らかにすること、あるいは三木のような重要人物のもとに立ち寄らせて検挙の理由をつくることであった。『危険なだましあいのゲーム』とはそのようなものを含んでいた。このように推測していいのだろうか」と、含みを持たせつつも、タカクラの脱走が仕組まれたものである可能性を示唆したのである（鹿島 2017：15-17）。また、タカクラの脱走前に、「高倉テルは、差し入れに行つた奥さんに向かって、『近々面白いことが起こるよ』と言つた。（中略）古在さんは奥さんから直接耳にしたらしい。近々面白いことがありうるはずがないと思っていたから、おやつと思った」という古在の伝聞を紹介した藤田省三の証言（藤田 1998：192）、高倉の娘が「面会に行くと、そのたびいつも担当の刑事の目を盗んでは、『近いうちに奇蹟が起こるぞ』と謎めいた内証ごとをほのめかした」という松本慎一の伝聞を紹介した山崎謙の証言（山崎 1979：184）をもとに、これが事実なら「警察となんらかのしかたで意を通じていた可能性すら浮かび上がってくる」と指摘している（鹿島 2017：6）。

久野が指摘する横浜思想犯保護観察所における「日本精神研究会」がどのようなものか、その存在を含め、詳細は不明である。久野は、1939年8月に京都地裁で懲役2年、執行猶予5年の判決を受けたあと、敗戦の日まで「思想犯保護観察」に処せられたが、保護観察所には行かず、非協力を貫いたといわれる（寺島 2014：39）。その久野が、「研究会」への呼び出しを受けたとすれば、タカクラが思想犯保護観察法の適用を受けた1942年4月以降のこととなるが、1回も保護観察所に行かなかつた久野が、「研究会」の実態を知っていたとは思われない。タカクラは、横浜検事局（思想犯保護観察所）の係であった佐野検事正とは、別の意味で仲がよかった。それは、その検事正が天津教弾圧事件を取り扱つたことで知られたが、神代文字で書かれた文献があり、天津教について尋ねられ、教えたことがあったこと、その代わりに箱根用水を研究していたタカクラは、横浜にいるうわさのある友野家の当代を探してもらったこと、権原神宮外苑の発掘調査（1938年）に一緒に行ったことなどがあったからだという（タカクラ 1978、251-252、タカクラ・テルより聴取、1981年11月21日）。タカクラの思想犯保護観察に関連して知られるのはそれくらいである。また、久野は「危険なだましあいのゲーム」を指摘するが、信頼する三木の検挙の理由づくりのためにタカクラが当局と「危険なゲーム」をしたとは考えられない。さらに、藤田や山崎の証言にしても、あくまでも又聞きであり、その真偽を検証する必要がある。タカクラの検挙を何度も体験している家族がタカクラの言動を簡単

に漏らすとも思われない。

タカクラの警視庁脱走についてより強く疑惑を指摘したのが、山田正行である。山田は、藤田省三や山崎謙の証言、古在由重や安田徳太郎の回想などをもとに、「逃亡」というより「泳がされた」か、「警察となんらかのしかたで意を通じていた」かとみるのが適合的であるとし、タカクラは「義兄さえ陥れようとした」として、警察の「卑劣な手先になりさが」った、「世にもきたない謀略」をはかった人物としてタカクラを描いている（山田 2019：286-291）。その中で、警視庁脱走に関連して古在や安田にも特高の張りこみがあったことから、古在や安田も「逮捕された可能性がある」とするが、当時、警視庁は多額の費用を使ってタカクラを指名手配したといわれ、タカクラをかくまえば誰でも逮捕される可能性があったのであって、古在や安田を殊更取りあげる理由がわからない。とくに義兄である安田については、ゾルゲ事件の宮城与徳と真栄田三益との関わりで、一時疎遠となつたが、安田のゾルゲ事件での公判の傍聴を許されたのは安田の妻とタカクラだけであり（安田 1976：245、276）、大磯の自宅の土蔵では安田の医薬品と安田の母の着物を保管しており（タカクラ・ツウ 1955：460）、当時、そうした間柄の安田を陥れる理由は何もない。山田は、タカクラが警視庁を「2月24日」にも「脱走」したかのように記述し、タカクラの脱走後の再検挙を山崎の回想にしたがって「3月21日」ではなく「3月27日」とするなど、独自の見解を明らかにしているが、すでに指摘してきたように、山田の見解は誤りである。

いずれにせよ、タカクラの警視庁脱走が、タカクラと警察が仕組んだものだと主張するのであれば、タカクラが警察を使って三木を検挙させる理由は何だったのかを明らかにすべきである⁽³⁰⁾。

タカクラが警視庁を脱走したのはなぜか。敗色が色濃くなっているにもかかわらず、敗戦によってファシズムが倒れたのちも、国民が自力で社会を変えていく準備はできていなかった。獄外の知識人の多くは、近い将来の敗戦を予測はしていたが、行動を起こすこともなく、ただ事態の成り行きにまかせていた。このときタカクラは、自力で社会を変革し、それによって民衆を解放しようという信念に駆りたてられていたといってよい。政治犯が脱獄することは、生命をかけてのことであった。多くの知識人には観念としてしか受けとめられていなかった「民衆の解放のために尽くす」という信念と民衆への信頼が、タカクラにその行動を可能にした。それは、信州に骨を埋めるつもりで定住し、地域民衆の中に根をおろす活動を進める中で培われてきたものであった（山野 2002）。だが、そのタカクラを一晩泊めてかくまつた三木は捕らえられ、獄死する事態を招いてしまった。逃亡中のタカクラを危険をおかして温かく迎えた三木の魂の底には「熱いヒューマニズムが脈々として流れていた」（古在由重、太田 2001：176）が、三木の獄死によって、「戦後、おそらくもっとも重要な思想的な仕事をしたであろうひとりの思想家」（日高 1980：3）を失うことになったのである。

注記

- (1) タカクラ・テルの表記については、高倉輝一高倉テル→タカクラ・テルと変わるが、ここではタカクラ・テルで統一する。
- (2) 関口竜夫は、このタカクラの取材旅行に同行し、青森の十和田湖近くの戸来農民学校等を取材したことなどに触れ、「私はこうした旅の汽車中でも日本語のお話、又十和田湖畔の旅館での『中国宮廷秘話』など貴重なお話の数々は、今も私の記憶にのこっており、今日の私の思想形成のすべては先生に教えられたものである」と述べている（関口竜夫・菊子 1978：170）。
- (3) 山崎謙は、松本慎一から聞いた話として、タカクラの「主催する『大原幽学研究会』があやしまれてそのメンバーが一網打尽に検挙され、『第十六次共産党事件』というレッテルのもとに無茶な追査をうけているとのことであ

った」(山崎 1975: 243) と記しているが、タカクラが「大原幽学研究会」を組織したことはなく、タカクラや関口竜夫・佐藤正二らが検挙されたのは、この久保田無線厚生農場事件（工場農場コルホーズ運動関係）である。

(4) 佐藤正二は、「12月末近く、タカクラ先生の奥さんから、一通の手紙がきました。『主人が検挙されたので、万一件があるかも知れないから、用心して下さい』と。そこで友人の住所録だけ学校のロッカーの下に隠しました」と振り返り、検挙された直接のきっかけは「江東地区の労働者になっていた富山出身の友人たちと私の交際で、その家族たちのスナップ写真の真ん中に、私が写っていたこと」と、能登半島の高校時代の友人Hの農場をタカクラが指導に行ったことがあるが、「この農場の図面がタカクラさんのノートにあり、その真ん中に『サトウ正二君紹介』という名前がうかつにも書かれて」いたため、「タカクラさんのお供をしたわたしも検挙されたわけです」と回想している（さとう 1996: 291-292）。なお、「12月末近く」というのは「11月末近く」の記憶違いと思われる。

(5) タカクラが警視庁を脱走した日付については、タカクラが晩年、豊多摩刑務所での体験を綴った際、「三月十二日、取り調べ中に、取り調べ官が、用事で、ほんのちょっと座をはずしたのを見て、わたしは、警視庁の正門から脱走した」と書いたことから（タカクラ 1986: 133）、山田正行は「6日脱走したことが定説で、彼は偽っている」としているが（山田 2019: 286）、原稿では「六日」と書いたのを「十二日」と書き直しており、おそらく三木清を訪れた日と勘違いしたのであろう。タカクラが三木洋子に謝罪したときの文章では「二十年の三月六日に、警視庁から逃げました」と書いている（高倉 1946: 78）。なお、山田は、タカクラのさきの豊多摩刑務所の文章について、「取り調べ中に、取り調べ官、用事で……」と書いているとし、「読点が多すぎる一方、『が』が書かれておらず、国語国字の『改革』というより、小学生の下手な作文と同様である」と批判しているが、「が」の文字は入っており、正確に文章を引用していないのは山田である。タカクラの文章については、賛否があるが、すでに1957年段階で、杉森久英が「僕は、左翼の人なんかわざとやさしく書いているのは、猫なで声で……」と批判し、本多秋五が「タカクラさんみたいなああいう変な仮名使いの文章をほかの人が書いたら、読めないとおもう。あの人は読めるが」と語ったのに対し、柳田国男が「そんなに変ですか」と問い合わせ、「あの先生（注、タカクラのこと－引用者）に文章では感心することができました。親切をなかに持っていてね」と語っていることを紹介しておく（新春特別座談会 1957: 52）。

(6) タカクラ・ツウの「私の歩いてきた道（自伝草稿）」は、1953年に理論社から出版された「タカクラ・テル名作選」全6巻に引き続いで出版する予定で書かれた自伝の原稿であるが、原稿を完成させることができず、結局出版されなかった。ツウは夫・テルから聞いたことをもとに原稿を書いている部分もあり、のちにタカクラも原稿に目を通し手を入れているところがある（高倉太郎より聴取、1998年3月21日）。自伝草稿は高倉太郎が清書したものを、生前、氏のご厚意でコピーさせていただいたものである。

(7) タカクラは、警視庁を脱走し三木清の疎開先に立ち寄ったあと、青森の大金西蔵のもとでかくまつてもらったが、その大金は、タカクラは「敗戦に近い日本を救うために、近衛文麿公の意を受けて、或る画策のために、ひそかに行動してみたことも事実であった」と述べているが（大金 1952b: 36）、タカクラからはそのような話は聞いたことがなく、その真偽は不明である。

(8) タカクラ・ツウの自伝草稿では、3月6日にどこで泊まったかの記述ではなく、三木清の疎開先を訪問したのちに浦和市に立ち寄った記述があるが（タカクラ・ツウ 1955: 435）、後述するように、タカクラが久喜から青森へ向かうのに浦和へ戻りしたとは考えにくい。なお、木村亨は、タカクラ・テルが警視庁を脱走後、「テルさんはその脱走の足で三木清氏の住まい（高円寺）を訪ね、三木氏の洋服を無断拝借して着用のまま逃走をつづけて、さらに山崎謙さんの柵村（茨城県）の家へ辿りついで暫時、山崎さんの家にひそんでいたことがあった」としているが（木村 1990: 63）、この回想には疑問がある。

(9) タカクラ・テルの長男である高倉太郎は、「大金西蔵をたよって青森へ行った」と発言している（自由大学研究会第14回秋季研究例会、1986年9月27日）。この青森行きについて、鹿島徹は、松本慎一の回想をもとに、「その当時、津軽すなわち青森が当時の非合法活動家の逃走・潜伏ルートとして知られていた」としているが（鹿島 2017

：7）、タカクラは当時共産党员ではなく、非法活動家ではないので、東北へ逃れたことはのちにタカクラから聞いたことにすぎないとと思われる。

(10) 古在由重は、「版の会」で「三木と戸坂」という題で報告した際、「高倉は最初山崎謙のところへ行ったのですが、山崎は、自分があぶないと思って、三日目ぐらいの時に、同じ埼玉県下にある三木の家に連れていきました」と述べたという（川上徹の記録より、山田 2019：287より引用）。ただし、山崎の家に行ってから「三日目ぐらい」というのは再検討の余地がある。なお、藤田省三は、山崎はタカクラを「家には入れないで、『いいところへ連れていってやる』といって、歩いていける地理に三木が疎開していたから、その家に行った」としているが（藤田 1998：193）、タカクラも山崎の家に行ったことは認めており、この証言には疑問がある。

(11) 山崎謙の検挙に関して内務省の文書を見ていくと、「山崎謙」の名前はなく「染谷米吉」の名前になっているという不可解なことがある。内務省『昭和二十年度検挙者名』（1945年作成、国立公文書館所蔵）によれば、三木清、中條登志雄らの検挙の理由を、「右者ハ久保田無線厚生農場グループ関係者ニシテ工場経営農場ノコルホーズ化運動等ヲ通ジ土地制度ノ左翼化ヲ図ル」と記述し、山崎謙については、山崎の住所である「埼玉県北葛飾郡富田村^{マツ}二一九」には「山崎謙」の名前ではなく、「染谷米吉」という本籍の姓「染谷」（妻登美子の実家の「染谷」家の養子となつたため）と「謙」の改名前の名前「^{みち}善」を分解した「米吉」とを組み合わせた名前で記載している。警視庁『（検挙者調）』（国立公文書館所蔵）も、「染谷米吉」の名前で「前記高倉輝ガ警視庁ヲ脱走シ左翼運動ヲ継続スル意図ノ下ニ訪問スルヤ之ヲ隠匿シ金品其ノ他ヲ供与セリ」と検挙の概要を記し、内務省送致係『昭和十三年以降事件送致参考簿』（国立公文書館所蔵）も「山崎謙」の名前ではなく、「染谷米吉」となっている。また、タカクラを1泊させただけの三木が拘置所に留め置かれ、6日間の山崎は10日で釈放されているのも釈然としない。藤井良彦は、「山崎が10日ほどの留置処分ですんだことも腑に落ちない点ではある」と、山崎謙に疑惑の目を向けている（藤井 2025：316）。

官憲当局が文書の中で名前を隠すのは当局が何らかの意図があつてのことであり、当局とつながりをもつ人物である可能性は否定しきれない。山崎の場合の名前の記載の仕方は、本名ではあるが妻の旧姓「染谷」と改名前の名前を分解した「米吉」を組み合わせた名前で、実に奇妙である。山崎こそが当局と何らかのつながりがあり、タカクラを三木のもとに行くようにそそのかした可能性が高いと考えられる。三木洋子は、そのことを知って、山崎を「わたしは許さない」と言った可能性がある。

(12) 風見章は、手記「落穂録」の中でも、「晩めしをたべた頃、玄関のベルが鳴り出す。三郎が出て行くと、東大崎交番の巡査が、高倉輝といふ男が今夜こゝへ立ち廻りさうだから、その節は密告してくれといふ話だといふ」、この話を聞いて、「高倉氏の関係事件がどうであるかは知る所でないが、二十余年來知った間柄である。そのものがたづねて来たといふのに密告はひどい。法を破ったものなら自首するよう勧告しよう。（中略）それにしても密告はいやだ」と書いている（北河・望月・鬼嶋 2008：370）。

(13) 安田徳太郎の回想には多くの記憶違いがある。引用した文章のあとには、「その後、聞いたところによると、高倉さんは警視庁の留置場を脱走して、埼玉県の三木清さんの疎開先に寄って、そこで泊めてもらい、旅費を借りて、青森行きの切符を買い、青森で警視庁の特高につかまって、連れもどされたとのことであった。脱走中高倉さんの長女は人質として、警視庁の留置場に入れられた。これは三木清を検挙するために、警視庁特高課のしくみだ、世にもきたない謀略であった。三木さんは筋書きどおり、脱走犯人をかくまつたという理由で逮捕され、敗戦直前に獄死した。」とあるが（安田 1976：283）、(1)タカクラが再検挙されたのは埼玉県の豊岡町であり、青森で警視庁の特高につかまつてはいない、(2)脱走中タカクラの長女は取り調べを受けたが、人質として留置場に入れられることはなく、(3)三木清が獄死したのは敗戦直後の9月26日といわれており、敗戦直前ではなかった、とここでだけ記憶に3つの誤りがある。証言内容の考証が必要であることを示している。

(14) 山田正行は、自身の論文に引用した安田徳太郎の回想について、安田が「二月頃」とする依田警部補の訪問とタカクラの三木清疎開先訪問とを一連のものとして回想しているにもかかわらず、2月と3月と2度も警視庁を「脱走」したと解釈し、そのうえで「2月に『脱走』し、3月にも『脱走』したことは尚更ありえない」とする（山田

2019: 288)。そうであるならば、「2月24日」の「脱走」は「3月6日」の脱走の誤りだと素直に解釈すればよいことである。もし山田が「2月24日」に警視庁「脱走」があったとするならば、タカクラがどのようなルートで逃走し、いつどこで逮捕されたのかを明らかにすべきである。なお、警視庁『(検挙者調)』(1945年、国立公文書館所蔵)によれば、タカクラについて、「関口龍夫等ト共ニ前記農場ニ於テ左翼運動ヲ展開中、検挙セラレタルガ、昭和二十年三月六日警視庁勾留中脱走シ再び活動継続セントシタルモノナリ」と、「3月6日」に脱走したことを記述している。

(15) 三木清は、記事の中で、「高倉君のローマ字移植も大いに賛成で哲学といえば難しいと考えているが、やさしい文字で書き現せればこの上なく結構だ、僕も援助を惜しまないつもりだ」との談話を載せている(『読売新聞』1938年12月26日朝刊)。その後、タカクラ・テルは、その1つの準備として、西田幾多郎の講演をローマ字書きで「G akumonteki hōhō Nisida Kitaro」という題で『中央公論』(1939年6月号)に発表している。

(16) 野上彰は、タカクラ・テルから三木清宅の留守番を依頼されたときのことを、次のように回想している(野上 1963: 11-12)。

「ある日、朝の十時ごろ、日本棋院へでかけようと、溜池の交叉点を渡っていると、高倉テルに呼びとめられた。／『ああ、いいところであった。実は頼みがあるんだ』／ひどく改った言い方なので、何事かと思うと、三木清が埼玉県の久喜へ疎開することにきめたが、適当な留守番がいない。だいじな原稿や本などは疎開先へもっていいくつもりだが、あとにもいろいろ大事なものは残ってしまうし、人も訪ねてくるだろうし、だれか信頼のおける人はいないか、と高倉に相談したというのだ。それで、ぼくが適任だと思って訪ねてようかと思っている矢先に出会った、すまないが、もしその気があるなら、高円寺の三木のところへ訪ねていってやれば喜ぶよ、という。」こうしてタカクラから依頼された野上が三木の高円寺の家を預かることになった。

(17) 石川源一郎が賭博で逮捕されたという経緯については不明である。染井佳夫(「石川家の人々」を読む会会長)は、石川の人物像について、「遊んでいた人で、いろいろな人とつきあっていた。会社にもほとんどいなかった。賭博で捕まったことがあるのかは分からぬ」と語っている(染井佳夫より聴取、2019年11月16日)。山崎謙は、埼玉県豊岡町の「地方有力者」、すなわち石川について、「高倉のファンではあるが高倉の名簿に載るようなジャンルの人ではなかった。高倉のいには、日ごろその人はしばしば高倉をおとずれたが、その都度いつも、『先生が何かまとまった原稿でも書く時は御遠慮なく私の家の離れ座敷をおつかいください』と申し出て、最高の好意をしめしていたそうである」と述べている(山崎 1975: 247)。

(18) 山崎謙の回想にはいくつか記憶違いがあり、「高倉から後日聞いた話」でありながら、タカクラの逮捕を3月27日とするのも、その1つである。山崎の回想に必ずしも信をおけないことに留意する必要がある。また、森(山下)徳治が、タカクラが「ペラペラしゃべっていた」のを聞いたのが3月27日だとすると、3月25日には巣鴨拘置所に送られており(山野 2019)、警視庁にはいないので、辻褄が合わない。なお、山崎は戦後、三木について、いくつか文章を発表し、その中でタカクラの脱走と三木の獄死についてもふれている(山崎 1948a; 山崎 1948b; 山崎 1951)。たとえば、「哲人三木清」では、「一身上の危険をかえりみないで高倉をかくまったく三木を評価し、その上で「私も、三木と一緒に、情を知りつつ高倉の逃亡を帮助した廉をもって警視庁につながれた」と書き(山崎 1948b: 172-173)、「思い出すことども」では、「三木さんの死は、もう誰でも知っているように、警視庁を脱出して来た高倉テル氏をかくまったく廉によって投獄されたための獄死であった」と書いている(山崎 1951: 34)。しかし、タカクラが積極的に自白したことについてふれた文章は知られていない。それが、30年後の1975年になって森(山下)徳治の一件を『紅き道への標べ』で明らかにしたのは、なぜなのか。鹿島徹は、この時点では、日本共産党を除名された山崎謙と中央委員会顧問のタカクラとは政治的に対立する立場にあったことに注意する必要があることを指摘しているが(鹿島 2017: 3)、山崎の回想するように、タカ克拉が「ペラペラしゃべっていた」かどうかはともかく、森の話が事実であったとしても、その自供が逮捕直後ではなく、洗濯屋の覚え書きが発見されたあとだとするならば、タカ克拉が自ら積極的に自白したことにはならないといえる。

(19) 内務省警保局『特高月報』(昭和20年1月~6月分原稿)によれば、「知情その逃亡行為を援助したる事実あるのみ

ならず思想的にも共産主義運動の支援者と認めらるる意識分子の存在」として三木清・山崎謙・中條登志雄を3月28日に検挙したことを記している（明石・松浦 1975：300-301）。

(20) 東畠精一は、三木清の検挙直後に警視庁に行って、三木が「脱獄援助罪の容疑」で捕まり、「思想犯ではなくて、通常の犯罪容疑者になっていた」と回想している。また、三木の逮捕の理由を「某氏（注、タカクラ・テルのこと－引用者）がたしか母堂の葬儀で数日間を拘引から解かれて帰宅したまま逃亡してしまって、漸くのことで再逮捕されたが、その逃亡の時に三木さんの疎開先を訪れて、服とか金とかをもらった」ことによるとしている（東畠 1968：3）。しかし、容疑に治安維持法違反がはいっていたことは、内務省警保局『特高月報』（昭和20年1月～6月分原稿）の「治安維持法違反者検挙者調」と題する一覧表にも三木清の名前が載せられていることからも確実であり（明石・松浦 1975：306）、また、タカクラの母・美弥が亡くなったのは1947年5月2日であり（（山野 2019）、東畠の回想にはあまり信をおくことはできない。服部健二も、三木清の獄死に関連して、「当時の共産党の幹部で、治安維持法の容疑で逮捕されていた高倉テルが、母親の葬儀の際に仮釈放されるのですが、タカクラは、それを好機として、敗戦の近いことを見込んで逃亡し、その途中、疎開していた旧友の三木の家（埼玉県鷺宮町）に泊めてもらったわけです」と記述しているが（服部 2000：157）、タカクラは当時共産党員ではないので誤りであり、また、母親の葬儀の際に仮釈放されたというのも誤りである。

(21) 神奈川県大磯町坂田山にあったタカクラ・テルの自宅は、高倉太郎「年譜タカクラ・テル」では「七月十七日」の空襲で全焼したとなっているが、平塚市への空襲は7月16日夜からで、市街の大半が焼失した（平塚の空襲と戦災を記録する会 2015）。周辺地域の大磯も攻撃対象となり、山王町や長者町付近、大磯駅や茶屋町付近、白岩神社付近、寺坂付近などに焼夷弾が落とされ、被害を受けている（富田 2016：3-4）。タカクラの自宅が全焼した様子をツウは、自伝草稿の中で詳細に記述している。そして17日の朝、避難していた山からおりてみると、「家わ、すでに、焼けおちて、土蔵ばかりがくすぶっている。ひのき作りの、ぜいたくなこしらえの家も、いまわ、全くの残骸となって、横たわっている」状態であった。書斎の「灰のなかにわ、タカクラにとって、かけがえのない品品がふくまれていた。多くの未発表原稿のほかに、大原幽学の遺品や、ハコネ用水の資料、鷗外や荷風の手紙おはじめ、さいきんわ、西田幾多郎さんからの手紙、柳瀬さんの遺作となった、白系ロシア人の肖像画、その他、言語学、農業の文献など、タカクラの汗と思いでのこもった、いっさいのものが、灰となって、横たわっている。わたしわ、いまさらのように、これまでの自分の無責任な態度おはんせいさせられた。もし、わたしに、タカクラのるすお、さいごまで、守りぬくだけの意志があったなら、とうぜん、これらの資料わ、疎開しておくべきものであった」と書いている（タカクラ・ツウ 1955：455-458）。

(22) 警視庁では三木清は、同時期に収監された羽仁五郎らの回想からは、はじめ留置場の中でも広い一房に入れられ、疥癬の疑いで七房に移されたのち、再び一房に入れられたようである（栗原東洋 1955：94-96、羽仁 1948：142）。中島健蔵は、10月1日に高円寺の三木宅を弔問し、東畠精一・豊島与志雄・清水幾太郎らと「相談」した際のことを、「偶然、警視庁以来七月下旬まで、すぐ近くの監房にいて、くわしく様子を見たという青年の報告」として、「ほとんど想像を絶する獄則と、リンチ（疥癬患者の使っていた毛布を、消毒しないで使わせたための発病。）直接に暴行を加えたかどうかは別として、虐殺にひとしく」と記録している（中島 1977：261）。この中島から聞いた思い出話として、日高六郎は、「三木清が疥癬になったのは、疥癬の病気をもつ囚人の毛布を三木清にあてがった疑いがある。それは、巧妙にしくんだ殺人である。」と、より直截に書いている（日高 1980：2-3）。

(23) ただし、大内兵衛は、豊多摩刑務所では「お湯にも入れず薬品もない」状態だったとする（大内 1948：14）。なお、栗原東洋は久保田無線厚生農場事件の関係で1945年2月7日に検挙され、4月30日に釈放されている（内務省送致係 1938～1945；内務省 1945：3）。

(24) ただし、大内兵衛は、「外部からの差入も内部の食物購入も許されなかつたらしい」（大内 1948：14）とし、豊島与志雄も「三木は、どうしてみたことであらうか、接見も差入れも許されなかつた」（豊島 1945：13）としている。東畠精一も、「わたしは獄中の彼の唯一の連絡人（？）となっていたが、結局のところ面会も一度も許されなかつた」とし、「この間わたしは焦慮を重ねたが、全くどうにもならなかつた」と、回想している（東畠 1968：3-

4)。東畠が差し入れを行っていたかどうかは不明であるが、梨木作次郎は、1988年のインタビューで、のちに知ったこととして、「三木清については、近くに住む東畠精一先生だけが亡くなるまで面会や差し入れをなさっておられたそうです」と、語っている（梨木 2002：57）。なお、藤田省三は、古在由重から何回も聞かされた話として、「東畠精一が身元引受人になればいつでも釈放すると警察側が言っている。それで古在さんたちが東畠に頼みに行つた。そのときの東畠の答えがふるるつてると、これは古在さんから何十回と僕は聞かされた。『国法に刃向かうようなやつの身元引受人に俺はならん』と言下に断つた、と」と、語っている。東畠は、「国法を口実に使って、自分の保身をはかった、そのことによって三木清を見殺しにした」というのが、藤田の評価である（藤田 1998：193）。

(25) 三木清の死亡日は9月26日が定説となっている。ただし、神山茂夫は、獄中でつけていたメモをもとに「9月24日」に死亡したとしている。獄中から持ち帰ったメモには、24日の欄外に小さく「河上『去る』」とあり、「これは河上肇と三木との関係を偽装した『三木死去』の記録である」としている（神山 1948：41；神山 1954：167-168）。

(26) 中村武彦は、日本主義的国家革新運動に関わっていた人物で、1933年の神兵隊事件や41年の平沼騒一郎暗殺未遂事件などに関わり、45年8月4日、懲役9年の刑を執行されて豊多摩刑務所に収監された。刑務所では、神山茂夫と風呂で一緒になることが何回もあったが、「神山の特権は桁はずれ」で、入浴も時間の制限がなく、「悠々と湯に出たり入ったりして」いて、そのそばに同じ治安維持法関係で収容された者が、「規定通り看守の号令で、碌々身体を洗わぬうちに追い出されてゆく光景を見ながら全く気にもとめない」、「自分一人が殿様気分で威張っているだけの、思いやりのなさ、利己独善ぶりには呆れる外なかった」と、神山を批判している。また、神山や中西功が、三木の「すぐ近くの監房にいて」、「共産主義者を庇護したばかりにひどい目にあっている哲学者に何らかの助け舟を出すことは容易にできた」にもかかわらず、「彼らは平然と知らぬ顔をして見殺しにした」と、三木を放置したこと批判している（中村 1994：262、265）。ただし、中村は、官憲当局が三木を獄死させた責任には触れていない。

(27) ただ、同じ時期に豊多摩刑務所の病棟に収監されていた中西三洋は、三木の獄死した状況を、当時の看守や雑役の話をもとに、次のように書いている（中西 1986：256-257）。

「九月二十六日の夜、私たちが床に入って就寝している真夜中、私の隣りの房になにかを運び込む物音、人が頻繁に出入りする音で私は目をさました。／白衣をつけた人や、高級警察官が制服をつけて出入りしています。しかし、なにが起こったのかわかりません。私は監房のドアにつけられた覗き窓を中から押し上げて廊下の状況を見たのです。／翌朝、雑役が朝食を持ってきたのを待ちかねて、タベ隣りの房で何が起きたのかを質問したところ、有名な学者の三木清氏が亡くなつて遺体をこの監房に運んできた、おそらく、雑居房で亡くなつたので体裁をつくろうためにこの病棟に運んできて、ここで亡くなつたことにしたのではないか、そのため検死もこの監房でおこなわれた、ということでした」。

(28) 布川角左衛門は、坂田徳男に宛てた手紙（坂田徳男宛布川角左衛門の手紙、1945年9月28日、宮島 2012：68；宮島 2020：46-47）の中で、三木清が亡くなり、屍体を引き取りに行ったときのことを、次のように書き記している。

「三木清さんが拘置所で死にました。昨日（注、9月26日—引用者）東畠さんから店に知らせがあり、丁度私は不在でしたが、帰店して聞き唖然としました。何といつてよいか、このやうな時期に至つて死なれるなんて、只々残念に思ふのみ、惜しみても惜しみきれぬ出来事です。貴兄もさぞ驚かれることでせう。三木さんをあなたのお宅にお招きすることはもう出来ぬのです。折角三木さんに今後大いに活躍してもらひ度いと一入期待をかけていましたのに。

昨日は検死がすまぬとかで死体が引取れず、今夕薄暗くなつて、私がゆきました時、これから引取りに出かけること、私にも行ってくれることにて、一緒に野方の拘置所にゆき、三木さんの無言のからだをお棺に納めリヤカーにのせ、四人でひいて高円寺の家に運びました。實に悲しいめぐり合せであり感慨無量でした。病氣

は急性じん臓病のこと。二十二日頃から悪くなり手当てをしてはくれたらしいのですが、二十六日午後三時ころ遂に死去された由、詳しい最のことは明日その担当者から聴取することになっているのですが、いくら聞いても三木氏はもう帰らず、只何故死んだかをはっきりさせる程度。囚はれて約六ヶ月、実に気の毒な最後でした。」
(29) タカクラ・テルは、三木清が亡くなった日を「九月二十八日」とし、看守から呼び出され、医者の診察を受けた日を「九月二十九日」としているが（高倉 1948：77-78）、三木の死亡が定説にしたがって9月26日とすれば、診察を受けたのは9月27日だったと思われる。

(30) 内田弘も、安田徳太郎の回想（安田 1976：282-283）をもとに、「高倉テルが官憲の手先となり」「三木清を治安維持法違反で逮捕＝投獄する謀略に加担した」と主張しているが（内田 2015：35-36）、山田正行と同様に、タカクラ・テルが官憲の手先となって、なぜ三木清を逮捕させる必要があったのか、その理由を明らかにすべきである。

引用・参考文献

- 明石博隆・松浦総三 1975 『昭和特高弾圧史2－知識人にたいする弾圧下－』太平出版社。
- 石川嘉彦・石川三郎・阿部正和編 2002 『石川家の人々』石川家本家。
- 岩倉博 2012 『ある哲学者の軌跡－古在由重と仲間たち－』花伝社。
- 内田弘 2015 「三木清と尾崎秀実の東亜協同体論」（『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』No.42）。
- 大内兵衛 1948 「三木清の死に方」（三一書房編集部編『回想の三木清』）。
- 大金西蔵 1952a 「日本に来た？キリスト」（『旅』第26巻第10号、1952年10月号）。
- 大金西蔵 1952b 「高倉テル氏のこと」（『新文明』第2巻第11号、1952年11月号）。
- 太田哲男編 2001 『暗き時代の抵抗者たち－対談古在由重・丸山真男－』同時代社。
- 尾崎秀樹 1999 「未完の画家・宮城与徳の場合」（『国家機密法に反対する懇談会だより』No.7、1999年、http://homepage2.nifty.com/ikariwoutae/starthp/ozaki_miyagi.htm、2015年3月18日閲覧）。
- 鹿島徹 2016 「三木清の再検挙と獄死をめぐって（一）－速水融氏へのインタビューから－」（『フィロソフィア』第104号）。
- 鹿島徹 2017 「三木清の再検挙と獄死をめぐって（二）－速水融氏へのインタビューから－」（『フィロソフィア』第105号）。
- 神山茂夫 1948 「四つの文字－三木清君の死－」（『人民評論』1948年4・5月合併号）。
- 神山茂夫 1954 「偽れる解放の日に」（『文芸春秋』臨時増刊、第32巻第16号、1954年10月）。
- 北河賢三・望月雅士・鬼嶋淳編 2008 『風見章日記・関係資料1936～1947』みすず書房。
- 木村亨 1990 「横浜事件のころ 編集者の戦時日記・6」（『記録』第141号、1990年12月号）。
- 木村尚貴 2025 「『人生論ノート』今に響く視点」（『朝日新聞』2025年4月27日朝刊）。
- 久野収 1975 『三〇年代の思想家たち』岩波書店。
- 栗原東洋 1955 「獄中の三木清」（『改造』第36巻第2号、1955年2月号）。
- 警視庁 1945 『（検挙者調）』（国立公文書館所蔵）。
- 古在由重 1963 「観戦記 暮を愛するタカクラ・テルさん（藤沢名人特別指導碁第2局）」（『囲碁クラブ』第10巻第2号、1963年2月号）。
- 古在由重 1967 『戦中日記』古在由重著作集第6巻、勁草書房。
- 小林勇 1946 「孤独のひと－三木さんの一周忌に－」（『世界』第11号、1946年11月号）。
- 小林勇 1961 「父と娘－三木清－」（『雨の日』文藝春秋社）。
- 小林勇 1963 『惜櫻荘主人－一つの岩波茂雄伝－』岩波書店。
- 小林勇 1972 「人間を書きたい 〈三木清〉」（『文芸春秋』第50巻第16号、1972年12月号）。

- さとう正二 1996 『秋風急なり－医師隨想百拾壱話－』コスモス通信社。
- 新春特別座談会 1957 柳田国男・本多秋五・山室静・杉森久英・荒正人「日本文化の伝統について(下)」(『近代文学』第12巻第2号、1957年2月号)。
- 新明正道 1975 「自由大学の思い出」(『自由大学研究』第4号)。
- 関口竜夫・菊子 1978 『水仙の花咲く家』関口竜夫・菊子金婚式記念文集、自費出版。
- 関口菊子 1982 「日記のなかから」(『水仙の花咲く家』No.2、関口竜夫・菊子記念文集、自費出版)。
- 関口竜夫 1984 「終戦前後」(『水仙の花咲く家』号外、No.23、1984年7月)。
- 高倉太郎 2014 「年譜タカクラ・テル」(最終稿、2014年3月14日)。
- タカクラ・ツウ 1955 『私の歩いてきた道(自伝草稿)』。
- 高倉テル 1946 「知識の良心」(『世界』第9号、1946年9月号)。
- タカクラ・テル 1978 『箱根用水』東邦出版社。
- タカクラ・テル 1986 「豊多摩刑務所」(豊多摩(中野)刑務所を社会運動史的に記録する会編『獄中の昭和史－豊多摩刑務所－』青木書店)。
- 高見順 1965 『高見順日記』第5巻、勁草書房。
- 寺尾五郎・降旗節男 1991 『対論革命運動史の深層』谷沢書房。
- 寺島俊穂 2014 「市民的抵抗の哲学－久野収の思想から－」(『関西大学法学論集』第63巻第5号)。
- 東畠精一 1968 「そとから見た三木さん」(『三木清全集』第19巻月報、岩波書店)。
- 戸田達雄 1972 『私の過去帖』自費出版。
- 富田三紗子 2016 「大磯町内における空襲被害について」(『大磯町郷土資料館だより』No.36)。
- 豊島与志雄 1945 「三木清を憶ふ」(『文芸』第10号、1945年11月号)。
- 内務省 1945 『昭和二十年度検挙者名』(国立公文書館所蔵)。
- 内務省送致係 1938～1945 『昭和十三年以降 事件送致参考簿』(国立公文書館所蔵)。
- 中島健蔵 1958 「三木清」(亀井勝一郎(著者代表)『わが友』東京出版)。
- 中島健蔵 1977 『雨過晴天の巻』回想の文学⑤、平凡社。
- 中島健蔵 1979 『回想の戦後文学』平凡社。
- 中西三洋 1986 「三木清の獄死」(豊多摩(中野)刑務所を社会運動史的に記録する会編『獄中の昭和史－豊多摩刑務所－』青木書店)。
- 中村武彦 1994 『維新は幻か－わが残夢猶迷録－』いれぶん出版。
- 梨木作次郎 2002 「救援活動の再建と政治犯の釈放(3・完)－梨木作次郎氏に聞く－」(『大原社会問題研究所雑誌』第523号、2002年6月号)。
- 布川角左衛門 1967 「三木清さんの想い出」(『三木清全集』第8巻月報、岩波書店)。
- 野上彰 1963 『囲碁太平記』河出書房。
- 野田宇太郎 1958 『灰の季節』修道社。
- 服部健二 2000 『西田哲学と左派の人たち』こぶし書房。
- 羽仁五郎 1948 「わが兄・わが師三木清」(三一書房編集部編『回想の三木清』三一書房)。
- 羽仁五郎 1976 『自伝的戦後史』講談社。
- 林達夫 1946 「三木清の思ひ出」(『世界』第11号、1946年11月号)。
- 日高六郎 1980 『戦後思想を考える』岩波新書。
- 平塚の空襲と戦災を記録する会編 2015 『市民が探る平塚空襲 通史編I 平塚空襲の実相』(平塚市博物館)。
- 藤井良彦 2025 『治安維持法下のマルクス主義』同時代社。
- 藤田省三 1998 「戦後精神史序説」(『世界』第644号、1998年1月号)。
- 柄田啓三郎 1986 「年譜」(『三木清全集』第20巻、岩波書店)。

- 松本慎一 1948a 「三木さんの『気をつけろ』」(谷川徹三・東畠清一編『回想の三木清』文化書院)。
- 松本慎一 1948b 「尾崎・戸坂・三木—死とその前後—」(『世界評論』第3巻第2号、1948年2月号)。
- 三木洋子 1948 「疎開していた頃」(三一書房編集部編『回想の三木清』三一書房)。
- 宮島光志 2012 「三木清と戦時下の出版文化—全集未収の婦人論と哲学辞典の改訂をめぐって—」(『福井大学医学部研究雑誌』第12巻第1号・第2号合併号)。
- 宮島光志 2020 「シンポジウム〔三木清の人生と思想：新資料を参考にして〕－三木清と運命の問題：〔中間者の哲学〕の結節点として－」(『法政哲学』第16号)。
- 森宏一 1967 「疎開のころ」(『三木清全集』第15巻月報、岩波書店)。
- 安田徳太郎 1976 『思い出す人びと』青土社。
- 山崎謙 1948a 「寂しかった三木さん」(谷川徹三・東畠清一編『回想の三木清』文化書院)。
- 山崎謙 1948b 「哲人三木清」(『闘うヒューマニスト－近代日本の革命的人間像－』学生書房)。
- 山崎謙 1951 「思い出すことども」(『思想』第329号、1951年11月号)。
- 山崎謙 1975 『紅き道への標バーわが心の生い立ち－』たいまつ社。
- 山崎謙 1979 『変革と反逆の77年－山崎謙自伝－』第三書館。
- 山田正行 2018 「三木清の生と死－聖の偏在 (Allgemeine das Heilige) のもと時を生き死ぬ (zeitigen) －」(『大阪教育大学紀要 人文社会科学・自然科学』第66巻)。
- 山田正行 2019 「三木清の生と死－饒舌な偽善と沈黙の意味－」(『大阪教育大学紀要 人文社会科学・自然科学』第67巻)。
- 山野晴雄 2002 「戦時下知識人の思想と行動－タカクラ・テルの場合－」(『法学新報』第109巻第、1・2号)。
- 山野晴雄 2019 「タカクラ・テル(高倉輝)年譜」(2019年11月10日作成、
http://www7b.biglobe.ne.jp/ningen_ikiru/saishin-takakuraterunenpu2019.pdf)。
- *山野「タカクラ・テル(高倉輝)年譜」は、何度か改訂されている。鹿島徹は、2013年2月14日作成の「年譜」を2017年12月12日に閲覧したとしているが(鹿島 2017: 26)、2017年12月にホームページで閲覧できるのは2015年11月17日作成の「年譜」である。
- 「年譜」最新版は2025年5月25日改訂のもので、<https://jiyudaigakukenkyu.net/shiryo/takakuranenpu-2025.pdf>で閲覧できる。
- 山野晴雄 2023 『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』自由大学研究・資料室。

(2019年11月20日脱稿、2026年1月31日加筆修正)